

A6.8.0
533

秘

ヒトラー 總統著
後篇 マイン・カムプ (ナチスの信條) (其の一)

昭和十五年六月

外務省情報部

情
195

40
40
a

外

調一0122

0364

後篇「メイン・カムフ」(其の二)「ナチスの信條」正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
20	4	當年の	當今の	99	3	終るといふ	終ふといふ
28	10	居られなず	居られず	94	8	生きたく	生れなく
28	14	利する間	利なる間	85	7	正に	既に
27	5	集りにする	集りになる	80	10	宿るところが	宿るところ
26	4	撰索して来た	撰索して未だ	7	7	人物高下	人物崇卑
19	5	各流	各派	10	9	浴ふ	浴ふ
16	4	教授連たる	教授連なる	13	末	置くやうにすれば	置くやうになれば
16	5	ものなる故に	ものなるが故に	末	7	なるもの	なるもの
15	4	優秀民族	優秀民族	13	末	法備	法備
8	7	民族維持	民族維持	44	13	天賦	天賦
6	1	種族が分れて	種族も個に分れて	44	4	生れたる	生れたる
4	2	居ても統一されて居れば	居ても兄弟間に闘いでも	41	9	個性	個性
1	9	夙に	夙に	34	3	立つてやる。國民を	立つて國民を

緒言

メイン・カムフの前篇はヒトラー總統の生立ちから、ナチス結黨までの叙述であつて、總統の自叙傳が主要な部分を占めて居る。後篇はナチスの政綱及ナチスの運動を記したものであつて、其の中「政黨と政綱」「國家觀」「國民と准國民」及「人材主義」の各章を採録したのが本篇であり、ナチスの國家觀を始め、國民教育の大方針は此の四章につきて居るとも言へる。「ナチスの信條」と題して上梓する所以である。本書を繕けば、ナチス黨の根本信念といふやうなものを知るに於て裨益するところ少くなくあらう。

昭和十五年五月二十三日

編者



目次

緒言

第一章 政黨と政綱の卷

一 既成政黨の政綱

二 國民的感情

三 ナショナリズムの意義

四 國民戦線の統一

第二章 國家の卷

一 三つの國家觀

二 ナチスの國家觀

三 良い國家と悪い國家

四 ドイツ民族の國家

五 選ばれた元氣者	三
六 民族と優生法	三
七 健康なる肉體	四
八 虚榮も方便	五
九 寡言沈黙	五
一〇 俠氣と度胸	六
一一 詰込主義と外國語	六
一二 歴史教育	六
一三 修身教育の要	六
一四 民族中心の愛國	六
一五 民族的觀念の養成	七
一六 機會均等の教育	七
一七 労働の意義	七
一八 形式ばかりの普選	八
一九 理想と現實	八

第三章 國民と准國民の卷

一 國民と外國人	八五
二 外國人の歸化	八五
三 國民と准國民	八六

第四章 人材主義の卷

一 民族本位と人物本位	九〇
二 精神的覺醒が第一	九〇
三 文化發展の動力	九一
四 人材登用の急務	九二
五 人物の淘汰	九四
六 大衆本位はユダヤ人の陰謀	九五
七 議會は諮問機關	九六
八 職能議會の新設	九八
九 自ら籠を垂れよ	一〇〇
索引	一〇一

第一章 政黨と政綱の卷

一、既成政黨と政綱

一九二〇年二月二十四日ナチスの民衆大會が開かれ、ミュンヘンのホーフプロイハウスの廣間に於て、二十五箇條の政綱が二千人の聽衆の前に披露せられ、各條大喝采を以て迎へられたことは既記の如くである。

ナチスは固陋なる既成政黨の舊式の謬見を打破し、勝ち誇れるマルキシストを敵に廻はして一大決戦を試みんとするものである。而して二十五箇條は則ち戦に臨まんとするナチス黨の旗印である。

ドイツは今や亡滅の危機に瀕してゐる。而して我等の闘は壊滅を既倒に回さんとするの大運動である。然れば我等の政綱も亦眞剣なものでなければならぬ。當年の政黨は選舉目當てに無責任な標語を考へ出して民衆をたぶらかすけれども、我が黨の政綱は選舉の標語であつてはならぬ。終始渝らざる固き信念！それが我が黨の政綱でなければならぬ。

今頃の政黨の所謂政綱なるものは良い加減に、デ、ハ、チ上げたものであつて、其の時の都合に依り加へ

たり削つたり勝手極まるものである。殊に此の弊は有産の既成政黨に於て甚しいのである。既成政黨の政綱は、所謂政綱委員會の手に依つて起草されるのであるが、その裏面の事情を知つてみると、ウツガリ、せざるを得ない。

政黨は新たに政綱を起草し、或は既に定まつて居る政綱の修正をやるが、起草若しくは修正の任に當る委員會の唯一の關心は次の選舉といふことのみである。委員は多くは議會の喰詰め者である。而して之等の喰詰め者が人心の黨を去るやうな氣勢があると見てとるや、同じく喰詰め者の黨内の長老を集めて相談するのであるが、彼等のなすところは、いつも同じである。則ち先づ委員會を設けることが第一であり、新聞の論調に察し、巷間の偶語に耳をそばだて、大衆の欲するところは何か、欲せざるところは何か、その欣ぶところは何か、欣ばざるところは何かを臆さず、之が第二である。而して之が爲に彼等は職人のところへも行けば月給取りのところへも行き、農民のところへも行けば中小商人のところへも行く。凡そどの階級でも關係のあるところは親しく就いてその希望を偵察し、それを基礎として政綱の修正をなすのであるが、必要があれば反對黨の政綱をもとり入れて恥づるところを知らない。

斯くて委員は集まり舊政綱を改めて新政綱を起草するのであるが、その舊を去りて新に就くに當りて聊かも信念なるものがなく之まで掲げ來つた肝腎の政治綱領でも人氣にさむると思へば之を捨てて顧みないことは、戦地の兵隊が汚れたシャツを脱ぎ捨てるよりも、と手輕だ。かうして出來上つた政綱は總花主義で、どの階級にも不満足を與へぬやうに出來上つて居る。曰く、農民は農産物を高くしてやらう。曰く、商工業者は商品が賣れるやうにしてやらうし、教員は月給を上げてやる。官吏は増俸してやるし、寡婦孤兒は國家で養つてやらう。鐵道は敷いてやる。關税は引下げてやる。租税も全廢は出來なからうが徹底的に減免しよう。その他、曰く何、曰く何で、都合の良いことばかりだ。抑も之が政黨の總花主義といふものだ。

此の如くにして心を用ひても、尙探りもれの階級があつたり、聞きもらした大衆の要求があつて、それをあとで知ることがあれば、惶て又其の階級に都合の良いことや、そのもれた要求を充たすやうな文句を政綱のうちに挿入し、之でどの階級からも憎まれる心配がないといふ見透しがついたらとて、それを掲げて愈々選舉場裡へ打つて出るのだが、そのいふところが大きい。曰く、我等立候補は國家改造の國士であると。聞いてあきれざるを得ない。

ところで選舉が終り、候補者が首尾良く當選して議員となり、議會に席を有することになれば、黨の政綱も誓約も忘れて終ひ、さきの起草委員會などいづの間に解散して名残を留めなくなる。かくて任期のあるうちは呑氣にくらすのだ。

併しながら、世のなかは夜ばかりでもないが、晝ばかりでもない。議員生活にも辛い半面がある。

四年の任期が盡きるか、或は任期が盡きなくても政變などで議會解散、總選舉施行となること、つととして居ようと思つても、つとして居られぬ不安なのが選舉前の議員の生活だ。エンゲルリングといふ蟲の袋が昆蟲のマイケーフアにならなければならぬやうに、一度議員に出たものは議員商賈がやめられないから、復び立候補の名乗を上げる。それまでの苦勞は並大抵でなく、議會が解散になれば選舉の地盤へ歸り、議會報告と言つて、自黨の功勞を譽め上げて反對黨をこき下ろし、やんやと言はせる魂膽であるが、それが豫期の如くうまく行かないでほめるどころか反對に聽衆から怒聲罵聲を浴せられ、ひどく不人氣なことがある。かうなると之が又大きな心配だ。選舉民の不平も聲の小さいうちは良いが、次第に大きくなつて來ると放任して置くことが出來ないから、何等かの對策を講ずる必要が生じて來る。と言つても他に良策のあらう筈がない。看板の色、あげか塗り換より他に氣の利いた方法はない。つまり又ぞろ政綱の修正にとりかゝるんだ。かくて再び修正委員會を設け、國民の要求を聞いて廻り、總花主義の政綱をデッチ上げるのである。ところが人間といふ者は馬鹿なもので、だまされると知つて居ても看板が新しくなり、新聞が又提灯を持つてうま、書き立てると、選舉民といふ者はそれに釣ひ込まれてわけもなく又もとの代議士を選舉する。思へば滑稽千萬でもある。

四

はそれで良いのであらうが、こんなことをして人をだます議員も議員だが、だまされ通しの選舉民も選舉民だ。側から見で居るものには堪へられない厭なことだ。

右に述べたのは主として既成政黨の内幕である。こんな風にして出て來る議員にも、こんな議員の集まつて居る既成政黨にも、氣味の悪い底力のある社會民主黨と太刀打の出來る筈のないの言はずして明かだ。

既成政黨は、始めからマルキシズムと闘ひ、之を克服するの肚もなければ見透もないのだ。元來西歐式のデモクラシーは白人の國を奪はんとするユダヤ人のからくりである。ユダヤ人は之に依つて白人の國を覆さんとするのであるから、デモクラシーを基礎とする議會政治に依つてユダヤ人と闘はんとするのは間違つてゐる。これは何人にも明かなことであるにも係らず、議員といふ者は頭がわるいから判り切つたことが判らないのだ。若しデモクラシーの多數政治で國家の運命が救はれるものなら、既成政黨の多數を占むる現在のドイツは國運の最も伸暢すべき時である。それにも係らず、國勢は伸びるところなくして反つて日に盛り、多數を擁する既成政黨が爲すところなくして、ならずもの集りに過ぎない少數の左黨にひさまはされてゐるのはどうしたわけか。そこにデモクラシーの欺瞞がなくてはならぬ。

マルキシストは國家顛覆の野心を包藏するものである。而して此の目的を達する爲に既成政黨を利

五

用し得る望のある間はデモクラシーとか、或は又議會政治とか言ふけれども、他日マルキシストに不利な政黨の大同團結でも出来てどうすることも出来なくなつたら、今度は掌を覆すが如く議會政治を攻撃し、之を捨て去ること弊履の如きものがあらう。而して議會政治を捨てた彼等は、直接行動に依り工場及び街頭の闘に進出し、民衆を煽動して擾亂を醸すこと及び一九一八年の時の如くなるであらう。デモクラシーの政治に依つて、ユダヤ人の隠謀に對處せんとするはいかにも馬鹿げたことである。

六

此の如く議會政治はユダヤ人のからくりとして存するものである。ユダヤ人は自己に利する間は之を利用し、自己に不利となれば直ちに之を捨て去らんとして居るのが今日の議會政治である。ユダヤ人は我等の敵である。議會政治の謳歌者は、敵に便宜な政治組織に執着してその危険を知らざるものである。

ところで既成政黨なるものは之を知らず、依然として議席の争奪に没頭し、それ以外に目的とするところがなく、御都合主義に依つて政策を一二にして憚らざる故に、その政綱なるものも亦何等據るところがない。凡そ政黨の掲ぐる政策綱領は、國家百年の長計を基とし、之を守るに確乎不動の信念を以てすべきものである。政黨の綱領も此の如くにして國民を引きつける力が生れる。既成政黨の政綱には國民を引きつける力がない。

マルキシストは國家の顛覆を目的とするものであること、繰り返し述べた如くだ。彼等の運動は陰謀である。陰謀固より悪むべきであるが、陰謀を遂ぐる爲にあらゆる力を盡してうまざる氣力と奮闘振りは敵ながら健氣である。此の時に當りマルキシストに對抗する唯一の手段は、既成政黨側でも今日の如き守勢に甘んずることなく、積極的攻勢に出でてマルキシストを正而より叩きつけることである。而してそれには今までのやうな御都合主義でなく、國民の望をつなぐべき政綱の樹立が先づ必要だ。

バイエルン中央黨は國家主義の政黨を以て任ずるものである。然るに同黨出身の閣僚は今や革命的だと言つて我等の運動を批難してゐる。我等は之に對して次の如く答ふるのみである。然り、我等ナチスの運動は革命的であるかも知れない。然しながら、卿等は議席の争奪に心を奪はれて不知不識の間にマルキシストの先棒をかつぎ、國民を悲境に陥れた。これ卿等の過ちである。我等の運動は卿等の犯した過を匡正せんとするのだ。我等は卿等の如く退嬰をことせず、どこまでも積極的に敵を攻撃するの態勢をとり、こゝに新しい國家觀を掲げ、之を實現するに確乎不動の信念を以てせんとするものだ。而して之が失はれた國民の獨立自由を恢復する唯一の手段である。

然ればナチス結黨に際し、我等の第一に警戒せるは我が黨をして他の政黨の如く政黨ずれせしめないことであつた。我黨は新しい國家觀を中心とする信念の士の集團である。若し我等にして議會の議

七

席を争ふ黨人の集まりにすることがあれば、それは此の上もない墮落である。我等はその點を互に警めた。

斯くて我等の定めたナチスの政綱は、其の規模の遠大なることに於て、先づ氣の弱い議會政治家の膽を奪ふものがあつた。

二、國民的感情

方今マルキシストの國際主義に對して、國民主義といふ字が盛んに使はれて居る。ところで國民主義なる字は意義が廣漠に失し、人に依つて解釋が異なり、極めてあいまいである。それ故に、國民主義を標榜して起たんとするものは、先づ國民主義の内容を明確にする必要がある。それでなければ國際主義に對しても力ある圖が出来ぬ。

國民主義は國民的感情を基礎とするものである。ところで國民的感情なるものは、宗教的感情といふが如く、之亦頗る茫漠たるものである。人間には本來宗教的感情なるものはあるけれども、大衆は哲學者でもなければ高僧でもないから、感情があるだけでは役に立たぬ。宗教的感情が力あるものになる爲には、狭くても具體的な信條を有する宗派に歸依することが必要である。教會の信條は目的ではなくて手段であるけれども、宗教的感情が血あり肉あるものとなる爲には、教會の信條はなくてはな

らぬ必要な手段である。

教會の信條があつて、始めて我等の宗教的生活は動搖しない。世人の今日神を信じ、善を欲し、惡を避けるのは、専ら宗教の信條あるが爲であつて、この信條が無くなつたら、依據するところがなくなつて、人々は歸趨に迷ふこととならう。人間の宗教生活には教會の信條は不可缺の條件である。

勿論、教會がなくても宗教的感情と云へば、そのうちに神の存在とか、靈魂の不滅とか、永遠の生命とかいふ觀念は内在して居るけれども、それが動かない信仰とならない間は、空中の樓閣の如く果敢ない、力のないものである。宗教的感情は貴いけれども、信仰とならなければ力がない。而して感情が信仰となるには、教會の信條がどうしても必要である。

國民的感情なるものは、此の點に於て宗教的感情に類せるものがある。國民的感情のうちにも既にある種の觀念が含まれて居る。然りながら、之をして眞に生きた實際の要求たらしむる爲には、政黨が之を具體的な政綱として掲げ、之を實現することに努めねばならぬ。内に國民的な感情があつたとて、それだけでは役に立たぬ。外國の制歴を脱却する場合にも、國民は獨立を欲するといふだけでは百年経つても獨立の偉業は成就せぬ。國民が眞に外國の羈絆を脱せんとせば、國民の總力を先づ軍備の充實に傾注する必要がある。國民的感情の達成にも之を實現する手段が伴はねばならぬ。

國民的感情はいかに正しいとしても、又それが奈何に大切なものであつても、政黨の政綱となつて

生きた政治運動とならざる限り、實際的の用をなさぬ。而して政黨も亦、此の如き國民的感情を基礎とした立國の大義を政綱として掲げ、一意之が實現を計るものでなければ、眞の政黨と稱するを得ぬ。此に於てか、國家の根本的改造に乗り出さんとする政黨は國民的感情に基いた政綱を掲げねばならぬ。而してその政綱は國民の政治的信念となるを必要とする。ところでその政綱なるものは空疎なる理想たるに止まらず、直ちに此の世に於て實現せられねばならぬものなるが故に、單り理想が高いばかりでなく、之を實現する手段方法をも考へねばならぬ。従つて黨の政綱を定むるに當つては、學者の理論と政治家の實際とが必要である。人間は本來缺點の多い弱いものであるから、理想ばかりを言つては始めから成功の望がない。國家改造の目的を達せんとせば、高遠なる理想のうちから人間として實現し得るものを抽出し、之に形體を與へることが必要である。此の如くにして始めて理想と實際との調和が生れる。

政黨の政綱は理論を旨とする學者と、民心の歸趨を看取するに敏なる政治家との協力に依らねばならぬ。

今や大衆は暗中に何もかもを模索しながら、それを掴むことが出来ない。而して多くのものの中には、既に判りかけて居る者もあるが、それもはつきりしないのだ。此の秋に當り、衆の内より一人身を挺して立ち、立國の大義を明かにして向ふところを知らしめたならば、國民は期せずしてその傘

下に集り來るに相違ない。

三、ナショナリズムの意義

我等はこゝでインタナショナルリズムと、所謂國民的感情との異なる所以のものを探求してみよう。「國家は民族問題と關係がない。國家は經濟の必要から生れたものである。然らざれば二三の者の權勢慾の所産に過ぎない。」これが今日廣く世間に行はれる國家觀である。此の如き國家觀は、民族の生命力を否定するとともに、人間としての個人の力をも否定するものである。その故は、既に民族を無差別平等に取扱へば、個人としての人間をも平等にみて、個人の間にも力の相違を認めなくなるからである。ユダヤ人は民族の差別を撤廢せんとするものである。これ則ち差別的な民族主義が不便にして、無差別な國際主義がユダヤ制覇の目的達成に便なるが故である。民族平等の説は民族の獨立した國家を破壊する目的を以て、ユダヤ人の唱へ出した謬説に他ならぬ。

ユダヤ人であり、マルキシストである徒輩の國家觀が既に民族の獨立を破壊するを目的とするものとすれば、之に對抗して國家の存立を防護せんとするものは、マルクス主義と異つた國家觀の上に立つべき筈であるに係らず、國家主義を標榜する既成政黨の國家觀が、マルキシストの國際主義に異なるもの甚だ少きは異とすべきである。既成政黨がマルキシストを向ふに廻して闘ひの姿勢をとりつ

つ、何事も出来ないのは、こんなことにも原因してゐるのであらう。マルキシストは世界をユダヤ人の手に收めんとして陰謀をめぐらして居るのだ。それが判らないとはなさないことだ。

國民的感情に基く國家観は、マルキシストのそれと全然趣を異にする。我等の國家観は民族の差別を前提とする。我等の國家観は民族を第一とし、國家をその次に置く。我等の國家観にあつては民族の生存権確保が目的であつて國家はその手段である。我等の觀るところに依れば、民族には先天的に優劣があり、高下があり、斷じて平等ではない。而して此の世界は優勝劣敗の原則の支配するところなるが故に、優れたるもの、強きものが榮え、劣れるもの、弱きものが衰へるのは天の命に由るものである。優勝劣敗、弱肉強食は自然界の貴族主義とも稱すべきものである。我等の民族観、又は人類種觀と稱するものは、則ち自然界の貴族主義であつて、我等は民族に優れたものと劣れるものがあり、民族に優劣がある如く、個人の間にも亦同じく優劣の差違あることを認むるものである。破壊的なマルキシズムに對し國家を護るの途は、人間を物と見ずして個人を認めるにある。國民的感情の要求する國家は、民族の生存を目的とすること右の如くであるから、時としては倫理にのみこだはつて居ることの出来ない場合もある。優勝劣敗、弱肉強食は良くないと腐儒はいつても、そんなことに頓着する必要はない。倫理はそれ自身に存在の理由を有するものでなくて、民族の存立に資するところあつて、始めて意義が與へられるものである。民族の發展に障礙となるべきものは、倫理として

も之を承認するを得ぬ。大行は細瑾を顧みず、之が我等の倫理觀だ。何となれば、必要なのは優秀な民族の生存を確保することだ。優秀な民族が亡び、ユダヤ人や黒ん坊のあいこばかりの世界となつたら、倫理を説いたとて一つも行はれなからうではないか。

人類の文化はアリアン族の存在に依りて居る。アリアン族が居てこそ文明もあり開化もあるのだ。アリアン族が衰へるか、或は亡び去ることがあつたら、地球は復びもとの暗黒時代に逆轉するであらう。それ故に、アリアン族保存の爲には弱いことを言つて居てはならぬ。

世のなかにわるいことは少くない。然りながら、優秀なるアリアン族を亡ぼして人類の文化を破壊せんとする程恐しい罪惡はない。アリアン族は神の寵兒である。神の寵兒に手を觸れんとする者は、神の威を恐れざる冒瀆者である。

マルキシストのインタナショナルイズムに對し、國民的感情を基礎とする國家観は右に述べた如くである。世の中は平和でなくて優勝劣敗の修羅場である。民族は互に競争して最も優れたものが他を抑へて最後の勝利を占め、支配民族として地球に君臨する。之が人類の運命であり、又生物の本能である。而して同時に我等ナチスの信條である。

今日では、尙はつきりしたことは判らぬが、人類の生活には早晩行詰りの生ずることがあらう。それは遠き將來のことであらうけれども、何かによつかりさうだといふことは何人にも豫感がある。而

してその時に當り、地球の人と物とを總動員し、支配民族として行詰りの打解に任ずるものは、單り
アリアン民族のみであらう。

四、國民戦線の統一

我等の國家觀は此の如くであるが、同じく國家主義を標榜する政黨でも國家に關する觀方は區々であつて一定しない。第一近頃各地に異なつた國家主義の政黨政社の起ることそれ自體が、國家主義の陣營に統一された政綱がないことを示すものである。此の點に於てマルキシストの運動は、一糸紊れざる統制振りを示して居る。インタナシヨナリズムを旗印とするマルキシストの陣營は、鐵壁の固さを見せて居る。この鐵壁を破るには、味方に於ても、國家主義、民族主義の旗印を一つに定める必要がある。それではければ眞實の戦は出来ぬ。

ところで健全な國家觀をはつきりさせ、之を一つの纏まつたものにせんとするにはどうしたら良いかといふに、それは新しい政黨があつて、國民本能のうちに動いて居る國家的感情を巧みに捕へ、それに理論的體系を與へて、國家主義の政綱を造るより他に途がない。國民の宗教的感を生かすには教會の信條がある。國民の政治的感情に依るべき足場を與へる政綱は、政黨の信條である。

マルクスのインタナシヨナリズムが力を得たのは、マルキシストが黨として活動せるためである。

マルクスのインタナシヨナリズムに對抗するには、國民主義も亦之を代表すべき政黨をもたねばならぬ。而して我がナチスは則ち自らその政黨であることを期するものである。

かくて我等の政黨組織に反對したものも、昨今は漸く我等の主張の間違でなかつたことを認めねばならなくなつた。蓋し、インタナシヨナリズムが一世を風靡したのは、マルキシストが軍隊的な政黨を組織し、それに依つて活動せるが爲であり、國民主義諸黨の振はないのは、國民主義を代表する政黨がなく、分れ／＼になつて統一がない爲である。

此に於てか、國民の暗中に摸索して來たつかみ得ないものを、彼等に代つて探し求め、之をつかんで彼等の前に提供するが、我が黨の主要な任務となつたわけだ。

換言すれば、立國の大義を根柢とし、時と、人と、場合とを参照して適當なる政綱を作り、國民として向ふところを知らしめ、國民主義の諸勢力を一丸として、マルキシズムによつからんとするものがナチス結黨の動機である。

第二章 國家の卷

一、三つの國家觀

一九二〇年から二十一年にかけて、時代遅れの既成政黨は我がナチスを以て非國家的なりとなし、各流相携へて新黨を抑壓すべしとなした。但し彼等は國家を口にすると雖も、既成政黨の間には本來纏まれる國家の定義といふものさへなかつた。殊に當時の大學教授連たるものは、多くは御用學者なるが故に、その説くところは時の政府に都合の良いことばかりで、國家の眞の意義に就ては突き込んで説明するものがなく、空虚な學說を並べて僅かにお茶を濁すに過ぎなかつた。

當時學者政治家の間に行はれた國家の定義は凡そ左の三つであつた。

(一) 一部の人は政府が勝手に人民を集めて造り上げたのが國家だと考へて居た。之等の人々は政府官憲を以て直ちに國家なりと考へるのであつて、官憲則國家といふ考へ方は今日最も廣く行はれて居る思想である。然りながら、此の如きは手段と目的とを取り違へた議論であつて、國家は人間の爲に存するものであるのに人間が國家則ち官憲の爲に存するものとなすのである。官憲則國家の學說にあつては、治安の維持以外に國家の使命がなく、官憲の前に叩頭する以外に國民の義務はない。笑

ふべき學說だ。

國家則官憲説を高唱するバイエルンでは、バイエルン國民黨、オーストリアでは保守黨がその代表的なものである。

(二) 第二の學說を奉ずる者は、數に於ては、第一の國家則官憲説を奉ずる者より少い。此の説を奉ずるものは、國家を盲目的に崇拜するのでなく、國家の存在に、ある種の條件をつける。此の部類の人々は、統一せる政府及び統一せられた國語の存在を國家の必須條件とし、國家の目的は官憲の支配でなくして國民の福祉増進にありとなし、人民の自由といふことを要求する。而して政體の如きものも固定して動かすべからざるものでなく、國民の利益に依つて變更し得べきものとする。就中、この人々の期待するところは國民の經濟的發展であつて、國家の使命は個人の經濟的生活を擁護するにありとする。有産階級の國家觀は概ねこの部類に屬し、政黨としては自由主義やデモクラシーの諸黨が之を代表する。

(三) 第三の學說は、國民は統一せられた國語を有し、而して國民は國威の發揚を目的とするものとなし、國家はこの目的を達する手段であると言ふのである。此の場合、國語の統一に重きを置くのは、國家が外に對して勢力を伸ばすに際し、國內の諸民族が言語を異にするは不便なりとなすのであるが、同時に國家の統一は異民族をも同化し得べしと考へるのである。

此の種の人々は、盛んに「ゲルマニジーレン」といふ言葉を使用する。ゲルマニジーレンとは異民族をドイツ化する謂である。ゲルマニジーレンはわるくはないが、之を唱へる人々に真の意味が判つて居ないのは遺憾である。嘗てオール・ドイツの人々の間に、之と同じやうな意見の行はれて居た時がある。則ち、オーストリア内のドイツ人は、政府の協力を求めて国内のスラヴ族を、ゲルマニジーレン、則ちドイツ化するべきであるといふのであるが、此の人々はゲルマニジーレンは土地について行はるべく、人間について行はるべきものでないことを忘れて居た。オール・ドイツの人々の口にするゲルマニジーレンとは、主として外部よりの強制に依り、異種族にもドイツ語を話させようとするのであるが、世の中にこれ程間違つた考はない。ドイツ語を話したとて、それでドイツ人になるわけのものでは決してない。ドイツ語を研究し、喋る言葉がドイツ語で、その上ドイツで投票するやうになつたとて、それで黒奴がドイツ人になるものでもなく、支那人がドイツ人になるわけでもない。ドイツ語の強制に依り異種族をドイツ化せんとする運動は、異種族をドイツ化せずして、反て徒らにドイツ民族の血を攪亂することになる。これが、オール・ドイツの人々に判らないのだ。今日では民族に言葉の相違があり、それに依つて種族の區別が保たれるのであるが、若し言葉の區別を撤し、一樣にドイツ語を用ひしめるやうになつたら、人種の區別も同時に失はれて、そこにドイツ人と異種族との混淆が生ずるであらう。オール・ドイツの人々のゲルマニジーレンが、異種族の同化とならずして、

ドイツ人の墮落となるべしといふのは之が爲である。古來の歴史に徴しても、征服民族が征服した異民族に國語を強制した例はいくらもある。然しながら、そんな場合に國語だけは被征服民の間に残るが、征服した民族は被征服民族の間に没入して跡をとめないのを常とする。

凡そ民族の民族たる所以は言葉に存するのでなく、民族の血に存するものなる故に、他の民族をドイツ化せんとするならば、ドイツ人と異なる他の民族の血をドイツ人の血に置きかへる必要がある。それでなければ、眞のドイツ化は有り得ない。而も他の民族の血をドイツの血にかへることは、言ふべくして行はれないことである。若しありとすれば、雑婚に依つて血の混合をはかることであるが、雑婚は偶々優れた方の民族の退化を招致するばかりである。征服民族は、優れた性質に依つて異民族を征服するのであるが、被征服民と雑婚をなすやうになれば、優れた性質は次第に絶つこととなる。殊に優秀な民族と劣等な民族とが結婚するときは、それに依つて生ずる雑種民族は、優秀民族の言葉を使つて居ても、優れた方の民族の文化は亡びて終ふ。かくの如き雑種民族の間にも、將に消え去らんとする燈火の最後の刹那に熾んな火焔を發するが如く、その民族の亡滅期に際して意外な文化の花を咲かせることがある。但し、それはこれまで異民族のうちにあつても、異民族に交らなかつた一部の優秀民族の子孫か、然らざれば雑種といつても、優秀民族の血が濃く交つて居る者が、優れた祖先の性質を發揮するのであつて、雑種のもが悉く然るのでない。雑種は全體として優秀民族の退

化を來たすものである。

オーストリアのヨゼフ二世は、ゲルマニゼーションの熱心な支持者であつた。若し王の企圖せるが如きドイツ化が、首尾良く成功するやうなことがあつたら、オーストリアの國家は存続したかも知れないが、オーストリアのドイツ民族の資質は著しく低下したであらう。何故ならば國內の異種族にもドイツ語を強制するの結果は、ドイツ人とスラヴ族との雜婚を盛んならしめ、それと共に、ドイツ族の文化は退歩したであらうと思はれるからだ。

ハプスブルグ王朝のゲルマニゼーションが、中途より放棄せられたのは、ドイツ民族の文化維持といふが如き高尚な目的から出たものではなかつたけれども、兎に角、オーストリアのゲルマニゼーションが徹底的に行はれなかつたのは勿怪の幸である。徹底的に遂行されたら、ドイツ民族は永くその文化を維持することが出来なかつたであらう。

單りオーストリアばかりでなく、ドイツでも一部の國民主義者は、ゲルマニゼーションに關し同様の意見を持つて居た。ドイツの國民主義者は、ドイツ語を強制的に普及することに依つて、ポーランド人をドイツ化しようといふのであるが、ポーランドに於ても、住民がドイツ語を使用するやうになつたら、ドイツの文化とポーランドの文化との混淆を來たし、ドイツの文化はそれに依つて低下するやうになるであらう。

異種族にドイツ語を強制することはドイツ文化の汚濁を來たすばかりでなく、間接にもドイツに、益よりも害を及ぼすことが多い。今日アメリカへ移住するユダヤ人のなかには、ドイツ語を使用する者が多いのであつて、アメリカ人は無智なるが故に、ドイツ語さへ話せばドイツ人にして終つて、ユダヤ人のわるい尻が悉くドイツへ持込まれる。これなどは頗る迷惑なことである。

私は曩にドイツ化は人について行はるべきでなく、土地について行はるべきだ、といつた。ドイツ化を土地について行ふといふのは、他の土地を取つてドイツ人がそこへ移住することである。我等若しゲルマニゼーションを口にするならば、人についてのドイツ化でなく、土地についてのドイツ化を口にするべきであつて、ドイツ人の歴史について觀るも、眞の意義のドイツ化の成功せるは、我等の祖先が劍に依つて獲得した土地に、ドイツ農民の移住したところである。かゝる地方に於けるドイツ農民の移住こそは、ほんたうのゲルマニゼーションである。惜しむらくは、ドイツ農民の移住に依つてゲルマニゼーションされた地方に於ても異種族と婚姻を通じ、雜種の民族を生じたところは、民族的の統一が損はれて結果が面白くない。

右に述べた如く、ゲルマニゼーションに於ては誤つた考へを持つて居るものは少くないのであるが、之は本節に掲げた(三)の國家觀を信奉する人々の通弊である。而して此の種の國家觀を有する人々も亦、國家は手段であつて目的でないことを解しない。それ故に、又國家の維持存続を人間存在の唯

一の使命と誤解する。凡そ人類の文化は民族の生活を基礎とするものである。従つて國家の最高使命は、民族の維持發展にある。國家存立の本來の意義は之を措いて他にないのであつて、此の本義を没却せるところに、上來述べ來つた三つの國家觀の根本的誤謬が存在する。

さきに擧げた既成政黨の國家觀が、いづれも民族と國家との關係を深く見ること知らないのは遺憾である。而して之が亦ドイツの、いつのまにかマルキシズムに荒らされるやうになつた所以でもあつた。マルキシズムは國家を民族に關係ないものとし、民族の差別なきインタナショナルイズムを主張するのである。

マルキシズムのインタナショナルイズムに對抗せんとせば、先づ國民主義者の國家觀を纏める必要がある。それでなければ、マルキシズムと眞向からの太刀打は出來ない。ドイツの國民主義者は國家のことを考へるに當つても、民族といふことに重きを置かなかつた爲に、自分ではさうでないと思ひながらも、いつのまにかマルキシズムに利用されることとなつたのだ。

我がナチス黨がその運動の始めに當つて、第一に國家なるものに關して的確な定義を下さんとするのは、インタナショナルイズムに對する國民主義諸派の旗印を統一せんが爲である。

二、ナチスの國家觀

國家については言ふべきこと一にして足りないが、そのうち前にも述べた如く、國家は目的でなく手段に過ぎないと言ふのが、國家に關するナチスの根本信念である。蓋し國家は人類文化形成の前提條件ではあらうけれども、人類の文化の源ではない。文化の源は國家でなくて、民族である。今日の世界の文化は、アリアン民族の精神力に依るものである。従つて、世界に國がいくつあつても、若し文化の保有者であるアリアン民族が亡び去るやうなことがあれば、地上どここの國に於ても現在のやうな文化を復び見ることが出來なくなるであらう。

今假に地球の表面に大異變が生じ、天地がひっくりかへり、海水が陸を浸して、僅かにヒマラヤのやうな高峰が、そのうちに屹立して居るといふやうな天變地異が発生したとしよう。かうなつたら、人類の文化などもあつたものでない。無論國家もなければ、人文の秩序などもあらう筈なく、數千年來の人類の記録の如きものも亦失はれて跡を止めない。見渡す限り大地は屍を以て被はれた泥の海だ。假令こんなに崩れても、僅かでも良いからアリアン人の殘存するものがありさへしたら、年代はかゝつても、いつか復び人類文化の花が此の世に芽をふき、枝を生じ花をつけ、實を結ぶやうにならう。之に反して、假に全世界が太平無事で、たわいなく存在を續けるとしても、文化創造の源である優秀

な民族が居なくなれば、人類の文化は荒廢せざるを得ないであらう。我等が國を造るに當つても造られる國家が大事なのではない。民族が大事なのだ。國家をなして居ても、ホンクラ民族は亡びて終ふ。今日我等の周圍を見ても、新興諸國といふものの中には、さきの案ぜられるものが少くない。これ亦、國はあつても、肝腎の國を造る民族が劣等だからだ。

二四

くどいやうであるが繰り返して曰ふ。文化を創るものは國家でない。國家の使命は只文化創造の民族を保護するにある。それ故に、國家の形はもとの如く存続しても、中の人種が雜婚などに依つて血の純潔を失ふやうなことがあれば、その國の文化は忽ち墮落して終ふ。ドイツの如きも、國家としては今後も尙存在を續けるであらうけれども、今日の如く民族といふことを上下ともに看却して居るやうでは、前途頗る憂慮すべきものがある。

改めて曰ふ、人類文化存立の要件は國家でなくて、文化の資格ある民族の存在である。民族の文化的能力は民族に固有のものであつて、他より與ふことも出来なければ、又奪ふことも出来ないものだ。優秀なる民族は、外部の條件がわるいときは一時ひつそくして居ても、いつかはその力を發揮せざれば止まぬ。それ故に、キリスト教渡來以前のゲルマン民族を、文化のない蠻民であつたといふのも大なる誤りである。ゲルマン民族は文化的民族だ。唯彼等の居住して居た地方が、北方の寒さの厳しいところであつた爲、欲するがまゝに天分の才能を發揮することが出来なかつたまで

である。若しもつと氣候の良い南方に住居を有し、而して劣等民族を奴隸として使役することが出来たら、恐らくはギリシヤ人やローマ人と同じやうな文化を古代に於て創り出して居たらうと思はれる。併しながら、此の如き文化的資質も、北方民族が悉く之を身に備へて居るのでない。ラブランド民族は同じく北方嚴寒の地方に住ひけれども、之を南方温暖の地方へ移したとて、決して文化的な民族にはならない。則ち文化的能力は、民族に固有なものである。之をもつとはつきり云へば、人類文化の種子はアリアン民族單り之を有するのであつて、之を發揮するのに遲速の差のあるのは、外部的環境の奈何によるのである。

以上を要約すれば、國家について次の結論が生れて来る。

國家は手段であつて目的でない。國家を造る目的は民族の生存を確保し、それに依つて本來有するところのあらゆる能力を自由に發展させ、之を妨げる内外の勢力を排撃することである。同時に民族の有する力は、一部は生存確保の爲に用ゐられ、残りの一部が文化的發展に向けらるべきものであつて、文化の發展にのみ全力を捧ぐべきでない。國家の目的は右に述べた通りである。従つて此の目的に添ふものは眞の國家であり、然らざるものは國家の名に値しない。

我等ナチス黨員たるものは、從來の誤つた國家觀をもつて居てはならない。これまでの國家觀は虚偽である。我等若し誤つて、既成政黨やマルキシストと同様の觀方を國家に對して持つことがあれ

二五



ば、それは虚偽の奴隷となるのである。國家は容器であり、内容は民族である。我等は容器と内容を明らかに區別せねばならぬ。大切なのは、容器でなくて内容である。容器の大事にせられるのは、内に容れて居る物體を保護せんが爲である。内に容れて居るものを保護することの出来ない容器は、無用の長物である。

二六

故に曰く、國家の最大の使命は、人類文化を向上發展せしめる、優秀民族の生存を確保するにあり。我等アリアン民族から云へば、國家なるものは我が民族の生存を確保することとまらず、ドイツ民族の有するあらゆる性能を發揮し、アリアン族をして地上に君臨せしめることとなるのである。我等の國家觀は正に此の如くであつて、今日世人の抱いて居る國家觀は誤りの甚だしきものである。我等の國家觀は從來の國家觀に一大變革命を與へるものである。従て、世人も亦我等を以て革命を企圖するものなりとして排撃する所以である。去りながら、我等は現在一時の毀譽褒貶に依つて動かされてはならぬ。我等にして眞理と信ずるところに向つて邁進し、中途に於て挫折することさへなければ、假令衆人の排撃を受けることがあつても、後世必ず我等のなしたことを理解するものがあるであらう。

三、良い國家と悪い國家

我等の國家觀は以上述べ來つた通りである。それ故に我等は又この標準に依つて國家の良否を定めることが出来る。凡そ國家の價値は、外部の形態に依るのでなく、専ら民族の生存を確保する力ありや否やに依つて定めらるべきものである。則ち、民族の生存條件に適合するばかりでなく、國家の存立に依つて民族の元氣の維持せられるが如き國家は良い國家であつて、その時々勢力の如きは問題でない。國家は新たに民族の性能を創り出すものでなくて、民族の既に有する性能を自由に發揮せしむるものである。それ故に、假にその國の文物制度が發達して居ても、その源である民族の將來を顧慮せざるが如きものは、わるい國家である。何故なれば、民族ありてこゝに始めて文化あり、民族が亡ぶれば、文化も亦從つて亡びるが故である。國家はどこまでも内容でなくて、形式である。それ故に進歩した國でも、ある點では黒奴族の國家より劣つたものもあり得ることになる。蓋し、民族の將來を顧慮せざるわるい國家は、民族の持つて居る良き性能をも枯死せしむるが、文化は低くても民族の保存に懸念なものは良い國家としなければならぬ。

我等の國家觀は右の如しだ。ところで、民族維持の目的に合致する國家の間にも亦、高下の別がある。同じく民族の維持と言つても、維持せらるべき民族の優劣が問題となつて來るのだ。それ故に、最も良い國家とは、民族の維持の目的に合致するばかりでなく、維持される民族も亦人類最高文化の保有者であるべき優秀な民族であることを要する。これ我等が國家の使命を論ずるに當つても第一に

二七

民族の奈何に重層を置く所以である。従つて、我等ドイツ人の國家を論ずるにも、先づ問題となすべきは、奈何なる人間を國家に包容すべきか、又その國家は何を目的とすべきかである。

二八

四、ドイツ民族の國家

惜しむらくは我がドイツ國は、民族的融合がうまく行つて居ない。各地のドイツ種族がドイツに落ち合つたが、すつかり混り切つて了ふ暇がなかつた。殊に三十年戦争以後は異種族が入り込んで、民族の血が不純となつたばかりでなく、人民の心にもわるい影響を與へた。公知の如く、ドイツの國境は四方に開放されて居る。而して國境の外にはドイツ人ならざる異種族が住んで居て、それが絶えずドイツの國內へ流れ込んで来る。これと同時に、北方系のドイツ人は東方系のドイツ人と隣して住み、西方系のもは又別の區劃を持ち、その間に血の雜つた種族が介在して居るといふ状況になつた。これはドイツにとり非常に不利なことである。同じ血だけの種族が分れて居ても統一されて居れば、一度危難に面するときは目前の小さな争をやめて一致協力、共同の敵に當るものであるが、ドイツ民族には國難を前にして國民が協力するといふ力が缺けて居る。之は各種のドイツ民族が處を異にして割據して居る爲であつて、割據も一面に於て良いこともあるが、差引勘定すると、利よりも害が多い。類例のない優秀なる先天的資質を有しながら、今日まで尙世界制覇の目的を達し得ないドイツ

國民の缺點は、全くこゝにあるとも云へる。若しもドイツに早くから民族的團結が出来て居たら、恐らくは、今日既にドイツ民族は地球上の支配者となつて居たであらう。而して世界歴史も亦、今日とは異つた経過をとつて居たらうと思はれる。平和は人々の欲するところである。然りながら、平和は氣の弱い婦女子の泣言に依つては出て来るものでない。若しドイツ人が、優秀民族として夙に劍に依つて夙に四方を征服して居たならば、そこに始めて眞實の平和が打ち樹てられたであらう。ドイツ民族が制覇の途を失つたのは、人類平和の爲にも遺憾なことである。

ドイツに入つたゲルマン種族が割據して居たことは、限りなき禍害を國家の上にもたらしたことが今も言つた通りだ。而して今日尙國內の分裂に悩んで居るのもその爲だ。併しものは觀方に依るもので、今日ではドイツの種族が割據して居たことは意外な幸運であつたとも考へられる。何故ならば、割據は民族の統一を妨げたには相違ないが、その代りドイツ國民のうちに最初の純潔で汚れない血をそのまま維持して居るものがあるは種族が互に割據して居た爲である。

かくて永い歲月の間、そのまゝの姿を保存して來たドイツ民族の一部のこそ、我等の將來にとり最も貴き存在である。民族の相違に無頓着であり、人間でさへあれば、どんな人間でも同じであつて、民族には關係がないとせられて居た時代にあつては、民族の異なることなどは問題とせられなくとも良かったであらう。然しながら、文化は畢竟民族に依存するものである以上、ドイツの原民族

二九

が、一部に於て獨立の形で維持せられて來たことは天祐であつたと言はねばならぬ。之がなかつたならば、ドイツ民族も國有の力を喪失し、同時に人類全體の文化も亦今日の如く光あるものとはならなかつたであらう。

ドイツ民族が純粹な形で保存せられたのは、意識的に努力した爲でなく、全く天祐に依ること右に述べた通りであるが、知らないうちにはそれで良いとして、一度民族の相違の大切なことを知る以上は、ドイツ民族が他のものと混淆しなかつたことを以て、天の祐けなりとして感謝し、又その幸運を徒爾にしてはならぬ。

惟よに、ゲルマン民族は人類の粹であり、ドイツ國民はゲルマン民族の粹である。ドイツの國家は則ち、此の如きドイツ民族の維持發展を確保すべきものでなければならぬ。

此の如くにして、始めて國家に存在の意義がある。更めて曰ふが、ドイツ民族は神が地上に降し給へる最も優秀な民族である。而して、この優秀な民族を維持し發展せしめるのが、ドイツとしては國家最高の任務である。

何等の目的もなく、漫然と存在する國家は機械であり、理想を有する國家は有機體である。我等の國家は死物でなくて、活ける有機體でなければならぬ。

ドイツの國家は總てのドイツ人を包容し、純粹なる他のドイツの種族をも一大傘下に集め、之をし

て徐々に世界の支配的地位に達せしめるのが、ドイツ國家の目的である。

五、選ばれた元氣者

遺憾ながら、現代人は國家を死物の如く考へて居る。國家を死物と考ふるが故に、文物、制度、人事その他總てが停滯して動かない。國家は有機體である。有機體なるが故に、總てが闘争である。かくて國家を機械の如き死物とせず、民族發展の搖籃なりとなすところに、始めて無爲停頓の時代が去つて、活々とした活潑な生ける時代が登場する。古今東西、時と處とを問はず、流れざるものは腐り、靜かにして動かないものは錆る。勝たんとするものは攻めねばならぬ。守勢を事とするものには勝利がない。人々は先づこの道理を知らねばならぬ。我等ナチスの掲ぐる目標が、愈々遠くして、之に對する民衆の理解の愈々少いところこそ働き甲斐があるのだ。

現狀維持にとどめるのは、國を治むるもの易しとするところであり、來るべきものを求めて戦ふのは、國を治むるもの欲せざるところである。今日の臺閣諸公は、無論易きに就いて欲せざるところを避けんとする。國家は理想を有する生物であり、ドイツ人はドイツ民族の爲に貢獻し、同胞の爲に奮闘すべきものである。然りながら、らんだな爲政治家にとつては、國家を機械の如き存在と考へ、ドイツ人でもドイツ民族の爲に貢獻しなくても、同胞の爲に働かなくても良いものとして置いた方が

無事で好ましいであらう。機械の如く考へて居れば世話はないが、國家を生物と考ふるときは、生物に免れ難い生存競争の心構が必要となつて来る。機械の如く考へて居れば、國民も亦機械的であつて良いが、國家を民族の生存競争場裡にあつて苦闘を續けるものと観ずる時は、國民の生活だつて決して機械的ではあり得ない。生さんが爲には國民全體の奮起が必要となり、國家の總力戦が必要となつて来るのだ。ところで懦弱な今の當局にはそんな決心のつかう筈がない。

然れば、新國家觀を中心とする我等の運動に對しても、既に骨格が弱く、氣魄も衰へて居る中産階級のもの、多くの同情を持たざること勿論である。此の階級のうちで來り加はるものがあるとするば、年齢はとつて居ても、尙元氣を誇る程の老人位なものであらう。若くても事勿れ主義の輩は逃げればかりだ。

我等の敵は限りなく多い。然しながら、衷心から敵對するものは寧ろ少くて、大多数はどうでも良いといふ連中だ。然らざれば、事勿れ主義のあいだ。こんなことを考へると、一度は誠に手頼りない感じがするけれども、考へて見ると、その頼りないところに我等の戦の偉大さがあり、同時に又働き甲斐もあるのだ。氣の弱い者は、聲を聞いただけで遁げて行く。なかには、少し位手向ふものがあるが、つても直ぐに尻古垂れて終ふ。そんな人間は味方としても信頼するに足らない。我等の旗印を見て飛込んで来る者こそ、ほんたうに闘志に燃えた頼もしい仲間なんだ。我等の目的はそのやうな闘士を集

めるにある。國民の一部分で、エナジーの強い奴が目的を一にして團結し、どうでも良いといふ主義の大家に對峙するとき、元氣の良い少数者に國民の多数が引きずられて行くのだ。世界の歴史を作るものは、いつでも少数者だ。元氣者は少くても、少数者の意志と力は、國民全體の意志と力となるからだ。それ故に、今日多くの人々にとり、障礙と思はれるもの多きところ、反つて我等の將來の成功を約束するものである。我等の使命は重く、我等の行手は峻険である。重くて峻険なるが故に、弱いものには堪へられない。同時に集まつて来るものは、一騎當千のものはばかりといふことになる。而して此の如き自然の淘汰のうちに勝利の保障が秘められて居る。

六、民族と優生法

地上に於ける生物は雜婚を嫌ひ、血の純潔を保つ傾向があり、之に反するものは自然の制裁を受くるやうである。混血は三世、四世、五世と世を経るに従ひ、生れる子供がわるくなる。之等の混血の子孫にあつては、良かつた方の親の性質が次第に薄くなるばかりでなく、血が混つて單一でない爲でもあらうか、性格も二つに分裂して、意志の統一がなく、生さんとするの力も弱い。それ故に、天下太平の時ならば良いけれども、一朝事あつて國民の奮起を要するやうな時に遭遇すると、血の單一な民族は團結して一致の行動に出ることは出来るが、血の純潔を犯されかけて居る民族は思ひきつたこ

とが出来なくて、良い加減なことで御茶を濁すやうになる。要するに、血の不純な民族は血の純潔な民族に勝てないといふことになるのだが、そればかりでなく、雑種の子孫は永く生きて居らぬ。同一の困難に遭遇しても、純粋な血のものは堪へるが、混血児は倒れて終るといふやうなこともあるやうだ。その上混血児中には、子供の生きなくなるものが少くない。之等は混血を忌む自然の厳しい制裁であるやうに思はれる。

三四

それ故に、或る民族のうちで、他の異民族と結婚をするやうなことがあれば、常人自らの心身の力が低下するばかりでなく、子孫は混血児でない近所の子供に比して體格、性能の劣るを常とする。それでも、永い間に再び同民族の血が雜つて来れば良いが、さうでなく、異民族又は混血種だけの間で婚姻を續けてゐる時は、それに依つて生ずる子孫は自然の法則に依つて淘汰されるか、然らざれば數千年を経る間に變化を重ねて、原民族の面影をどこにもとめない新しい人種となつて終つてあらう。此の種の新民族は、民族としての抵抗力は残つて居るが、優秀な民族の方の文化的性能はとくの昔に消え去つて跡をとめない。その場合でも、純粋な原民族が一部に存續して居るときは、雑種の他の部分のものはそれによつつけられて終ふ。雑種に依る民族は古い歴史があつても、單一な民族の勝れたものには勝てない。永い間に民族の自覺は出来ても、混血に依つて精神的の彈力の喪はれるのを奈何ともし難いのだ。

以上述べたところを綜合すると、次のやうな結論になる。

異民族の雜婚に依つて生れ来る混血の子孫は、畢竟亡びざるを得ない。唯一つ亡びずして存し得る機會のあるのは、雜婚の一方の優秀な民族の母體が、依然として單一な民族として存續し、混血の子孫がそのなかにまぎれ込んで居るときばかりだ。

之を他の方面から見ても、言葉を換へて云へば、一部少數のものの中に假令雜婚が行はれても、主要な部分さへ固く持するところがあれば、少しくらゐる不純なものがあつても吸収せられて、民族としての單一性が確保されるといふことになるのだ。

雑種のもが雜つて來てもそれに負けず、反つてそれを同化し、或は又克服して行く作用を、假に民族の更生作用とも言はう。民族本能の強いものなら、止むを得ざる事情によつて一時異民族の血を入れることがあつても、更生作用に依つて民族の純潔を恢復することが出来る。則ち、雜婚を餘儀なくした止むを得ざる事情が消滅すれば、これまで不自然な結婚を強ひられて居た優秀民族でも、自ら異民族を避けて同民族と結合し、それに依つて自ら雜婚がなくなる。而して基本民族が優勢でさへあれば、混血種は幅を利かすことなく、年と共に表に出られぬ蔭の存在となつて行くのだ。

かくて人間には本來雜婚を嫌ふ本能があり、又自然は普通混血種の存續を制するけれども、一度異民族と結婚せるものは、自ら省みて努力するに非ざれば體位性能の低下を免かれることは出来ぬ。何

三五

となれば、民族の相違を無視して異種族が互に結合し、雑婚に雑婚を重ねて行くときは、優秀な民族の血はいつか消え、出来上がる人間は魂のない生物となるであらう。斯かる雑種民族は、人獣といつたやうなものであらうが、文化を創造する有為な民族にはなれない。

又若し世界を擧げて人獣の舞臺と化するを欲しないならば、先づ人類の雑婚を防がねばならぬ。殊にゲルマン族の間にあつては雑婚を禁じ、ドイツ民族の血の純潔を保つを以て、國家第一の務とせねばならぬ。

斯く言つたら、弱虫の現代人は抗議をなすであらう。而して異種族との婚姻を禁ずるは、人權の自由を束縛するものだと呼ぶであらう。私は之に對して次の如く答へんとする。否、人間の權利のうち最も貴いものが一つある。而して此の權利は同時に最も重い義務を要求する。然らば最も重い義務とは何であるか。それは他でもない。民族の血の純潔を保ち、それに依つて人類文化の向上發展を期することである。

然れば、民族的なるを以て自ら誇りとする國家の任務は、第一に雑婚を禁ずるにある。優秀なる人間は神の姿に擬して作られたものだといふ。民族的國家は、神に似た民族の保存をはかるを以て任となすべく、猿と人間との混血兒を作らせ、それを默認して居てはならぬ。現在では法律の禁止がない雑婚を禁ずるは非人道的な行爲だとの批難の如きは願慮するに足らぬ。現在では法律の禁止がない

から、雑婚は公然行はれる。而してそれに依つて子供も出来れば、その子供が又結婚して子孫をまうけて行くことも出来る。混血兒は子孫を繁殖させて行けるのだ。之に反し、血の純潔な市民は幾多の點に於て意識的又は無意識的に繁殖を制限されて居る。今日どここの店へ行つても、産兒制限の薬を持つて居ないところもなければ、街頭でも怪しげな器具を賣つて居ないところはない。之等の賣薬や器具は健全な市民の繁殖を制限するものである。かくて、一方に於て混血兒の生殖には制限がなく、健全な市民の生殖が制限せられることになれば、結局國民の將來はどうなるか。答へは識者を俟つまでもなく明かであらう。同じく批難の口を開くならわるいものの繁殖を助け、良いものの繁殖を妨げるやうな措置をこそ攻撃すべきである。民族國家は、雑婚の禁止とともに性病、肺病その他惡疾の遺傳を有する者にも子孫繁殖の機會を與へてはならぬ。之は寧ろ法の恵である。惡疾者に對する斷種法を没人道的となし、健全なる市民の避妊を當然の道德として認めんとするが如きは、冠履顛倒の妄論だ。批難するなら市民の避妊の如きものをこそ眞先に攻撃すべきではないか。

混血種の種族保存を禁ぜずして、健全な市民の避妊を默認するは罪の最も大なるものである。之と同時に、キリスト教の僧侶が魂の救済を口にしながら、その容器である市民の體位が混血に依つて低下して行くことに無頓着なのは遺憾である。坊さんは、第一に混血の非を信者に説くべきだ。それを差し置いて、アフリカの奥地などへ入込んで、わかりませぬホットトットやツルカフの蠻民にキ

リスト教を宣布して居るのは、御苦勞千萬なことだと言ひたくなる。況んやそれに依つて、白人と土人との混血種が現はれて來るに於てをやだ。

カトリックでも良い。プロテスタントでも善い。假に教會の坊さん達に、神妙な心がけるとすれば、アフリカまで行つて土人の教化に務めるよりも、ドイツに居て、ドイツ人に良いことを教へた方がどんなにましだか判らぬ。弱い子供は當人ばかりでなく、周囲のもので難儀をする。周囲のものが難儀するばかりでなく、弱い人間が多くなつては國の將來も心配だ。両親があつても弱い子供は難物で、孤兒でも強いものは國の寶だ。若しからだの弱い夫婦があつたら、弱い自分の兒を産むよりも、國の寶である丈夫な孤兒を養つて子とするのが、神の覺召に叶ふ所以である。坊さんはこんなことを説き聞かせるのが良いのだ。その方がどれだけ坊さんの仕事としても貴いか知れない。かくて現代は民族の問題など、どこでも閉却されて注意するものがない。民族的國家の名のつくものは、先づ此の閉却されてゐるものを取り上げてうまく處理するのがその任務である。國家の生活はさまざまであるけれども、その中でも最も大切なのは民族の血の純潔を保つといふことである。世の中に寶は多いが、國家にとつて子供程貴い寶はない。民族的國家は、此の道理を國民の間に明かにせねばならぬ。凡そドイツの國民は己が健康でなかつたら子を産んでならぬ。世のなかにたつた一つのどうにもならない罪がある。己が弱かつたり、弱くなくても、身體のどこかに缺陷のある人間が子

を生むことである。同様に、世のなかで最も尊敬すべきことは弱かつたら子供を作らぬことである。民族的國家はこのことを國民に知らしめねばならぬ。弱いものが子を産んでならぬ如く、弱く健康で、當然産むべき筈のものが子を産まないのも罪惡として批難されるべきだ。健全な子供を育て上げて行くのが國家の務であるとするれば、個人の結婚にも干渉するのが當然であつて、國家は醫學上弱さものの子孫の弱かるべきことを説明し、一見して病氣があるものと思はれるもの、又は惡疾の遺傳あること明かなるものに對しては、斷種法を施さねばならぬ。同時に、丈夫で子供の産れさうな婦人はどしどし産むやうにしてやらねばならぬ。子供の産れるのが両親の心配の種子になるやうな困つた社會ではいかぬ。子供を生ませるには、子供の多い家庭はらくに暮らせるやうにしてやらねば子を産むものはならぬ。今日では、何人もそんなところへまで心を配つてやるものがない。國家は之等子福者の家庭の手當を考へてやるのが當然だ。國家は成人よりも、先づ子供を大切にしなければならぬ。肉體が健かでなく、精神の劣つたものは、己の持つ心身の病を子孫にまで遺傳させてはならぬ。政府は教育に依つて遺傳のことを國民に徹底させるべきだ。この種の教育は國の大事業である。近頃の戦争は誠につまらないものだ。然るにこんなつまらない戦争でさへ勝つた國は欣ぶ。國民に遺傳の大切なことを教へる啓蒙運動は戰さである。而も此の方の勝利は戦場の勝利よりも貴いものだ。病弱なるは恥辱でなくて不運だ。然りながら自ら病弱であり、病弱なる子孫が出來ると知りながら、欲を制す

ることが出来ずして結婚し、子供にまで悪疾を遺傳させることになる。許されない罪惡となる。之に反して、身體が弱くても、子を産むことを避け、他日國の護りとなるべき壯健な他人の子供を養うて子とすれば、敬服すべき人間とせらるべきだ。國家は先づこんな風に國民を教育せねばならぬ。然りながら、政府の仕事はどこまでも口頭禪に止まつてはならぬ。國民が理解しようと理解しまいと、輿論が賛成しようと反對しようと、そんなことに頓着なく、良いと思つたらすぐにも斷行する勇氣が政府に必要だ。

四〇

右のやうな優生學の道理を、永いことは言はぬが、せめて六百年も續けて行ひ、弱いもの劣つたもの繁殖が制限されたら、悪疾のない健康な國民が出来上ることであらう。而して、それを續けて行ひ、健康なものだけを組織的に育成して行けば、今日見るが如きからだの劣つた、そして心の病弱になつた者が跡を絶ち、健全なものばかりが残ることにならうと思はれる。何故ならば、民族乃至國家が優生の法を施行することになれば、個人も亦自らその方に意を用ひ、國民のうちでも健全なものを尊重し、又その子孫の繁殖するやうに努めるからである。

如此、優秀な次の時代の民族を造り出すにも道がある。それ故に、國家が新たに領土を獲得し、一部の國民をそこへ移すやうなことが出来ても、漫然として誰でも良いから行き度いと云ふ者を行かせる、といふやうなことをさせず、ほんたうの生粹なドイツ人でなければ行き度いと云つてもやらぬし、行つても土地を分けてやらないやうにする。土地の分配でも委員會を設け、會の審査を経て始めて土地をわけやうにする。かうすれば、ドイツの國境に沿うて設けられるであらうところの殖民地は、ドイツ人のうちでも最も血の純なものばかりの殖民地が出来、ドイツ民族はそこを足場として更に大飛躍をなすことが出来る。

此の頃の人間は、犬猫や牛馬に對しては種の改造に力を用ゐるが、人間の改造には無頓着だ。民族的國家では、人間の間でも疾患のある者は、黙つて己の子孫を絶つやうにならねばならぬ。否、厭や厭や政府の法律に従ふといふのでなく、欣んで自らが犠牲になるやうになるべきである。

世の中には多くの善男善女がある。而して或は他人の難しとする斷食や、禁慾を、不平を言はずにやつてのける。教會の教が彼等をしてこゝに至らしめるのである。正に教會の説教にこれだけの力がありとすれば、國家が國民をして優生法の必要を知らしめ、且之を實行せしめるやうに教へ慣らすことは、決して不可能ではあるまい。

當今の市民は、小さかしい輩ばかりであるから、容易に我等の言ふことをきくまい。優生法だの斷種だのと言つたら、始めから馬鹿にして結構なことだが、實行がどうかねと反問するであらう。私は之等の徒に向つて次の如く答へるであらう。君達は話にならない人間だ。私は君達と事を共にしようとは嘗て考へたことがない。君達に心配がある。それは命の心配だ。君達のひれふす神がある。それ

四一

は他でもない黄金だ。私は命を唯一の寶とし、金以外に貴きものあるを知らない人々には用がない。世のなかには君達ばかりの世ではない。命は金を持つて樂に暮らして居るものにとりてこそ無上の寶であるが、食ふや食はずの貧乏人には、命はそれ程有難いものでない。私が望をかけるのは命を惜しがらず、金の他に貴いもののあることを知れる人々である。そのうちでも、殊に私の望をかけるのは青年である。ドイツは民族的に團結した國家になるか、然らざればマルキンズムに蝕まれた國家となる他はない。而してその何れに落ちつくかは、全くドイツ青年の覺悟奈何にかゝつてゐるのだ。

中産階級の今日の弊は、社會に缺陷のあることを知らないことであらう、知つて居ながら改めないことである。彼等は言ふ、わるいことは判つて居るが、わるいと判つたところで、どうにもならないではないかと。抑も之が最もわるいのだ。わるいと知つたら、何故直ちに改めないのか。衰へたりと雖も、ドイツは今尙六七千萬の國民を擁する大國だ。この大衆を動かしたら、どんな危険だつて飛び越えられようではないか。然るにドイツの中産階級はそれをやらぬ。それをやらぬばかりでなく、敢然身を挺して運動を起すものがあると、遠くから眺めて居て、批評ばかりして居る。情ないことだ。彼等には眞剣さがどこにもない。今日歐羅巴大陸には禁酒の運動が行はれて居る。酒の害は猛獸毒蛇である。眞に國民を健康ならしむるには、酒の害を除かねばならぬ。當今禁酒ほど緊要な運動はないのだ。然るにも係らず、ドイツばかりでなく各國でも中産層の人々は、禁酒の運動に對しても

まじめでない。禁酒といふと、同じく例に依つて變な笑ひ方をして見せるばかりで、そんなことは言つたつて行はれるか、といふ。私にはそれが氣に入らない。

要するに、世の有産階級なるものは腐れきつて何の役にも立たない。どんな運動だつて、彼等に任せて置いたのでは、いつ目鼻がつくか見當がつかない。悲しいことだが、これも惡意があるのではなく、氣力がなくなつて居るためなのだ。既成政黨は有産階級を地盤とするものである。政黨が國家の公黨たるの性質を失つて了ひ、利を營む一部の階級の代表者のやうになつて居るのもその爲だ。之比すれば、無産階級は元氣の良し命しらずのプロレタリアをかき集めて居るから、潑刺として力が漲つて居る。プロの政黨は團志が嫌んだ。之だけでも無氣力な既成政黨がプロを向ふに廻はして太刀打の出來よう筈がない。既成政黨は朽ちた木だ。畢竟どうしたつて役には立たない。

七、健康なる肉體

民族國家の目的が國民の最も健全な部分を保存し繁殖せしむるにありとすれば、國民に對する政府の任務も亦、子を生むまでの世話にとまつて居てはならぬ。進んで、生れて來た子供を立派な一人前の人間に育て上げるまで、世話をしやらねばならぬこと、言ふ迄もない。

育を第一に推さねばならぬ。衆人を標準として論ずれば、健康なる精神をもつには、先づ自體が健康でなくては駄目だ。最も天才には身體の良いのが少く、病氣のものが多いやうであるけれども、天才は例外のものであるから、之を以て一般を律するわけには行かぬ。概して云へば、體位が低下すれば精神も衰へ、氣魄が失せて大きな仕事が出来なくなり、己が出来ないばかりでなく、偉人が起つてもそれについて行くことさへ出来ないやうな弱い國民になつて了ふ。

四四

かくて健康なる精神も健康なる身體がなければ宿るところがなきが故に、民族的國家の國民の子弟に對するには、始めから學問を注ぎ込むことを避けて、丈夫な身體を鍛へ上げることがさきにすべきだ。學問は肉體を鍛へた上で行ふべきであるが、學問の方でも、第一に力を用ゐるべきは品性の涵養であつて、責任感を重んじ、意志を強くすることなどは、どうしても青少年の頭へ叩き込んで置かねばならぬことである。智的教育はそれから後で宜しい。

民族的國家にあつては、人間の評價は次の標準によるべきである。則ち、學問はなくても體が丈夫で、品性が良くて、氣象のしつかりした者は、頭が良くて體の弱い者より貴いとするのである。之が民族的國家に於ける人物高下の標準である。國民が揃つて學者であつても、體がわるく、意志が薄弱で、平和などと氣の弱いことばかり云つて居るものは、天國に昇れないばかりでなく、現世で生活することさへ困難であらう。激しい生存競争は生ける者の運命だ。この競争に於て、敗けて亡びる者は

物を識らないものでなくて、知り過ぎて居るものだ。體が弱く意志薄弱で、決斷がつかぬやうでは、學問があつたとて何の役に立たう。人間は學問よりからだが大仕事であり、からだと學問と兼ね備はつたのが一番良い。希臘人が美しい肉體と輝かしい魂との結合を理想としたのも之が爲だ。

今日では體育のことは當人の自由に任かされて居り、當人に次で心配するものは親であつて、國家は不關焉をさめ込んで居るが、抑も之がいけない。民族的國家では、當人よりも親よりも國家が國民の體育に關心を持たなければならぬ。民族の健康を維持促進するのが民族的國家の最大任務なるが故である。かく言つたら或は驚く人もあらうけれども、學問の方では、今日既に政府の干渉が實行されて居る。國民の義務教育がそれであつて、小學校の教育は、當人が欲すると欲せざるとに係らず、國家が之を必要なりとして強制して居る。民族的國家は之を體位の方面にも擴充し、兒童は小さい時から政府で健康に注意し、からだを強くしてやつて、室の中へ籠つて居るやうな弱い子供を世に出してはならぬ。

體育は先づ母たる人の許に於て行はるるを必要とする。以前は衛生の知識がない爲産褥熱で倒れるお母さんが少くなかつたものであるが、人間一所懸命になれば何でも出来るものと見え、今日では衛生の技術が発達した爲、産褥熱で倒れるお母さんが極めて稀になつた。子供の體育のことも之と同じで、世上のお母さんや、お母さんになるべき女性の頭を根本的に改造したら、今後子供の體育のこと

四五

も生れてから間もない時からお母さんの手でうまく行はれ、へまをやることなくなるであらう。次で小學校へ入つたら、今日よりもつと多くの時間を體育に充ててもらはねばならぬ。現在のやうに、學校で學問を詰め込むやうではない。兒童は取捨選擇の能力がないから、澤山注ぎ込まれても、肝腎なことは忘れて、要らぬことばかり覚えて居るやうなことになる點も少くない。之がわるい。更に中學校へ行くと、體操は一週間二時間ばかりに過ぎない。その上、それが正課でなくて隨意科目となつて居るところもあるが、之なども、學問と體育との釣合がとれて居ない證據だとも云へよう。凡そ青少年は、毎日午前と午後とに、一時間宛スポーツでも體操でも良いから、身體を鍛へる必要がある。スポーツと云へば、多くの國民主義者でさへ躊躇して居るけれども、ボクシングなどは最も推奨されて良いスポーツだ。インテリのなかには、ボクシングに就てとんだ間違つた考を懷いてゐる者がある。擊劍を學ぶのは良いが、拳闘などは野蠻だと言ふのだ。何故だらう。スポーツの種類は澤山あつても、攻撃精神を助成し、敵の手許へ飛び込んで行く氣魄を養ひ、からだのこなしを良くすることに於てボクシングに優る競敵はあるまい。議論がかうじて來ると、學生は拳骨を奮ふではないか。その方が筆でいつまでも争つてゐるより淡泊で良い。賣られた喧嘩なら買ふのがあたりまへだ。逃げて行つてお巡りさんをつれて來るなどは、男らしくもないぢやないか。そんなことを考へて來れば、ボクシングのどこがわるいか、と反問し度いくらぬだ。殊に元氣な少年は、時々擲たれることに

も慣れねばならぬ。當今の頭ばかり發達してゐる人間は、無論變だと言ふであらう。然しながら、來るべき民族的國家の使命は、弱々しい文學青年を作ることでない。小廉曲謹の市民は民族國家の必要とせざる人間だ。民族國家は腕節の強い男らしい男と、男らしい男を生む女とを求めて居るのだ。凡そスポーツの用は身體を鍛へ、氣を強くし、動作を快捷ならしめる爲ばかりでなく、一般に人間の聲風を發揮する爲でもある。

顧みるに、革命前のドイツ上流の子弟は、お上品一方で育てられたものだ。若しお上品ばかりで育てられず、幼い時からボクシングでもやつて心身を鍛錬して居たら、恐らくはドイツの革命は起らなかつたであらう。革命の成功したのは、脱走兵やその他の無賴漢が強かつた爲でなくて、國家を擔當すべき地位にあつた者共が、餘りにも怯懦で、無氣力であつたが爲ではないか。學問ばかりで大きくなつて來た人間は、對手も亦學問で來れば良いが、腕で來られると一とたまりもなく參つて了ふ。ドイツの上層階級はそんな人々のみになつて居たのだ。而して之亦専ら教育の罪だ。ドイツの學校は官吏、技師、化學者、法學者を作ることを知つて、肝腎の男を造ることを忘れて居た。之がドイツ教育の弊害であつた。

惟ふに、生來臆病な人間は、教育の力を以てしても勇氣のある人間に造り上げることは六かしいであらう。然しながら、又他方から云へば、本來弱くない人間でありながら體育を疏かにし、身體を精

神を鍛へない爲に弱くなつて居るものも世のなかには少からずある。人間はからだは弱いと氣も弱くなるが、からだが強健だと氣も自ら強くなる。一九一四年の、夏から秋にかけてのドイツ軍の快速無比の進撃は世間を驚かしたものであるが、ドイツ軍の攻撃精神の旺盛なのは、平時から兵士のからだの鍛錬に力を用ゐ來つた爲であり、鍛への出來て居た兵士は、戦はずして既に敵を呑むの自信を己のからだに持つて居たのだ。何をするにしても、からだの強いことが第一の要件だ。

四八

ドイツは今や聯合諸國の足蹴にされて居る。此の秋に當つて最も必要なことは、ドイツ國民が自ら自信を持つことだ。而してドイツ國民に自信を持たせるやうにするには、子供の時から負けじ魂を注ぎ込むやうにしなければならぬ。かくて各自身體を鍛へて、誰にも負けないといふ自信の生じた時は、則ち國としてもドイツはどこにも敗けないといふ自信の生まるる時である。ドイツ軍の強かつたのは、個々の兵士が必勝の自信を有した爲である。今日ドイツ國民の元氣を復活せしめるものは、聯合國の羈絆を脱してもとの獨立を恢復し得る、といふ自信である。而してこの自信を得る爲には、第一に國民の個人々々が、己に對して自信を持つやうにならねばならぬ。

教育はかくの如く根本から改められねばならぬ。然しながら、之を實際に行ふのは容易の業でない。ドイツの類廢は一朝一夕のことでないから、之を一掃するのも亦僅かの歲月の良くするところでない。ドイツ國民は、これまで唯大人しくなるやうにと育てられたものである。ドイツ人の希望は現状

維持の事勿れ主義である。然るにドイツにして今日の屈辱を雪がうとすれば、國際政局の現状を打破し、ドイツを縛つて居る奴隸の鐵鎖を絶ち切り、敵の面をめぐけて投げつけてやらねばならぬ。之は荒仕事だ。現状維持の大人しい國民が、現状打破の荒仕事をやらうといふのだ。そのことの言ふべくして容易でないことは、言はずして明かだ。従つて、ドイツ人の頭を改造するのは容易なことではなくて、舉國一致の大努力を要する。

八、虚榮も方便

青少年の教育が既に體育に重きを置くにありとすれば、青年の服装も亦それに浴よものでなければならぬ。諺に馬子にも衣裳といふが、當今の青年が、流行を追ふて變な恰好をしてゐるのは見ても胸がわるくなる。

青年の服装は成るべく肉體の見える方が良い。夏のさなかといふに長い喇叭ズボンや、上衣も襟元まですつかり包んだやうな服装では運動が不自由なばかりでなく、自慢の肉體が見えなくなるのは惜しい。人は見榮坊は悪いといふけれども、見榮坊も虚榮も時にとつては方便として排斥すべきでない。私は成るべくからだが見えて青年に肉體の自慢をさせ度いと思ふ。さうすれば、青年も自然に肉體の鍛錬に重きを置くやうにならう。服装を誇ることになれば、富める者は買へるが、貧し

四九

五〇
いものは買へない。肉體の美を發揮することは貧富、貴賤の別なく、誰にでも出来ることだ。四肢百體をなすだけ外にさらすといふ生活法は他にも良い効果がある。今日ではからだの醜いものでも、衣に包んで外に表はさないけれども、之が昔の人のやうに、からだの外から一目見てわかるやうになつて居たら、多くの子女が外観ばかり美しいガニ股のユダヤ人の男などにだまされて、あたらしい一生を誤ることもなくならうと思はれる。尙美しい肉體を持つた男は、己ばかりでなく、子孫にも美しい肉體を傳へ、惹いては國民全體の體格を美しくするといふことにもなる。

以前は學校で疎かにしても、軍隊へ入ればからだをすつかり鍛へ直してくれたものであるが、今日では徴兵制が廢止され、子弟が軍隊に入ることがないから、青年の體育獎勵には學校で一層重きを置かねばならぬ。軍隊は單り個人の躰を鍛えるばかりでなく、軍隊に行つて來たものは、軍隊に行かないものに比べて、女にも持てたものだ。世の中も、女が強い男を好くやうにならなければうそだ。

かくて民族的國家なるものは、義務教育を受ける小學校に居るときだけ監督をなし、小學校を出て了へば放任して願みないといふやうなことをしてはならぬ。今後徴兵制が復活されたら、小學校を卒業しても徴兵年齢となつて軍隊へ入るまでは、政府の手に於て青少年の體育を監視する必要がある。今の國家は健康などを問題にせぬから、小學校を出さへすれば、どこでどんなことをして居らうと放任して願みないが、青少年は成人になるまで嚴格に取締るのが國家の務である。この務を果さざるも

の國に對して大なる罪惡を犯すものである。

青少年に對する務が右の如くであるとして、扱て奈何なる方法を以て、之を果すかといふのだが、それは今こゝで論じない。唯大切なことは、國家が青少年の體育管理をやるといふ原則の確立である。而して眞面目にその方法を求めるといふことだ。何れにもせよ、民族的國家の名を犯さんとするものは、單り學問の方面に於てばかりでなく、體育の方面に於ても學校を出た後の青少年を取締る必要のあることだけは疑の餘地がない。その際いかなる體育を施すかは、前にも述べた通り、こゝでは問題にしないが、大ざつぱに言へば、學校を出た青少年の體育は徴兵を目的とし、軍隊に入るまでに既に兵卒となるべき身體を造つて置くことを目やすとすべきであらう。今日まではそれがなかつたら、戰爭前でも軍隊へ入つて來る壯丁は、體育の方でもわかりきつた簡單なことから始めなければならぬ、といふ馬鹿げたことになつて居たが、入隊前に、國民教育で躰が出來て居れば、つまらぬ操練などに時間を費さず、始めから兵隊に仕立て上げられるから、非常に都合だ。

これまでの軍隊は、「進め」から「止め」までを教へねばならぬので骨が折れたけれども、民族的國家が出現すれば、そんな手数も省けて、軍隊では愛國的教育に力を多く用ゐられることになる。而して壯丁も亦直ちに必要な武器の操縦を學び、修養に専らとなり得るのだ。ドイツの軍隊教育は、次の如くに行はれたものである。則ち、ドイツの青少年は、軍隊に入つて始めて男に仕上げられる。壯丁

は服従を學ぶ。而してそれに依つて同時に他人を服従させることをも覺える。ドイツの壯丁は、黙して我慢することを學ぶ。わるいことを爲して叱られる時は勿論のことだが、假令わるくないと思つても、くち答へをせず、黙つて我慢をする。之がドイツ兵士の誇りであつた。ドイツの軍隊はかくして兵士を鍛へた。民族的國家でも、兵士を養成するには之と同様の方針を採用すべきだ。
更に兵士として學ぶべきは、自信力を強くし、部隊の協同觀念を養ひ、ドイツ國家の比類なき所以を解せねばならぬ。

五二

兵役を了へて隊を去るべき壯丁に對しては、二通の證書を附與することにした。一は兵役を終へた市民證のやうなもので、それを持つて居れば、公務につく場合にも便宜が與へられる。一は保健證のやうなものであつて、それさへあれば健康な男として結婚にも面倒がないといふことになる。こんなことも私が是非やつて見たいと思つて居ることだ。青少年ばかりでなく、少女の教育も亦之と同一の方針でやつて行きたい。少女の教育にあつても體育が第一で、學問は第二としたい。而して女子教育の目標が、徹頭徹尾良妻賢母でなければならぬこと勿論である。

九、寡言沈黙

斯くて青年教育の眼目は體育にあり、學問は第二であるが、學問のうちには品性の陶冶を第一とす

べきこと前に述べた通りだ。

人間の性質は生まれつきのもので云へるであらう。生來利己主義の人間は死ぬまで利己的の人間であり、いさみ肌の方は生れてから眼をつぶるまでいさみ肌の方である。人間の性質はどうにもしやうのないものであるけれども、餘程わるいものでない限り、教育の仕方でも良くなり、わるくなる人間も世のなかには少からずある。生れつき泥棒の根性の人間なら手の下しやうもないが、さうでなくて出來心でわるいことをする程度の人間なら、教育に依つてわるい癖を直し、眞人間に矯め直すことが出来る。反對に又それ程わるくない人間でも、扱ひ方がわるいと良くない人間になつて了ふ。此の點から云ふと、教育は馬鹿にはならぬ。

戦争中のことであつたが、ドイツ人はおしやべりで困る、といふ嘆聲が幾度も聞かれた。ドイツ人は黙つて居られなくて、直ぐにしゃべるから、知らしてならない國の秘密もわけなく敵へ洩れて困る、といふのである。悲しむべきことだが、それは事實である。而も戦前のドイツの教育を回顧したら、ドイツ人のおしやべりは、何の不思議もない。ドイツ人は、小學校に居るときは先生に告げ口をする子供はほめられ、黙つて居る子供は白い目で見られたものだ。ドイツの學校では、おしやべりがわるくて寡言沈黙の貴いことを教へたことがないのだ。小學校は寧ろ、おしやべりな子供を持ち上げる傾きさへあつたのは遺憾だ。ドイツでは名譽毀損その他で訴へたり、訴へられたりするものが非常

五三

に多い。而も此の種の訴訟の九割までは、おしやべりが原因となつて居るものである。こんなことはまだ良いとして、秘密にしてゐる工業上の技術をうつかり話して外國に盗まれたりするものもあり、中には黙つて居れば良いのに、要らぬおしやべりをして軍事の秘密が外國にもれ、折角やつた軍の苦心も大事なところで水泡に歸することも度々ある。それも平時なら、折角の準備が駄目になつたといふ程度で、損害は比較的少いが、之が戦時になると、その爲に一國の敗けとなつて取り返しのつかぬ破綻となることも絶無ではないのだ。ドイツ人はおしやべりを慎しまねばならぬ。之に就て注意すべきは、寡言沈黙の教育を幼い時から教へ込むことである。さうでない、年とつてからはおしやべりの癖は直さうと思つても直らぬものである。それに就て私は今の小學校の教育に文句がある。學校で悪戯をやるものがあり、探がしても判らないと、先生は生徒のなかの一人をつかまへて來て、犯人をしゃべらせるのだが、之が最もいけない。子供には子供だけの世界があるものであつて、仲間のとが大人に洩れることを好まない。彼等には小さいながらも連帶觀念といふやうなものがあるのだ。先生が生徒をして仲間の秘密をしゃべらせるのは、則ち兒童の連帶觀念を破らしめることになるのだ。一步を進めて言へば、仲間を賣らせるのである。之は惡むべき裏切である。かくて幼年の裏切者は、成人の賣國奴ともなるのである。先生から言へば、告げ口をする子供は重寶に相違ないが、その爲に子供の品性を損じ、甚しければ賣國奴とまで墮落せしむるの危険あるに至つては、學校の教師た

五四

るもの、深く思をこゝに致さねばならぬ。事實に於て、賣國奴といふものの中には、小學校に居た時から告げ口の好きであつたといふ人間が少くないのだ。

以上は僅かに一例を挙げたに過ぎない。概して今日でも學校の教育は品性の陶冶を全然閉却して居るが、之ではいけない。寡言沈黙は義勇誠忠とともに缺くべからざる國民道徳の一つであつて、學校は他のことを措いても寡言の徳を生徒に叩き込むべきである。次に子供の泣言をいふ癖もいけない。つらいことがあつても、無理なことがあつても、泣言を云はず唇を噛んで堪へ忍ぶやうに幼い時から慣らして置かないと、僅かに不如意なことがあつても愚痴ばかり言ふやうになる。例へば戦争が起り、夫が出征することになると、銃後からは愚痴をこぼしてやり、戦地からはつらいと言つて寄越す。戦地と銃後との間を往復する手紙は愚痴とつらい手紙ばかりで、郵便はそんな手紙の取次で手一ぱいといふことになる。之が一九一五年から一八年までの實際の状況であつたが、ドイツ人も小學校時代から學問ばかりに偏せず、克己の精神を叩き込まれて居たら、こんな醜態は演じなかつたであらう。

民族的國家の教育に於ける、體育とともに品性の陶冶に重きを置かねばならぬこと右に述べた通りだ。ドイツ國民の精神的墮落は由つて來るところ遠く、之を匡正することも容易でないが、教育の方針を一變し、學問をやめ、體育と品性との重點を置くやうにすれば、少くとも現下の弊害の一部は救

五五

はれるであらう。

一〇、俠氣と度胸

度胸と俠氣の養成も亦青年教育に於て缺くべからざるものである。

以前は、我が軍隊で次の如く言はれたものだ。間違つて居ても、命令した方がせぬより善いと言ふのだ。之を青年教育の方面に適用してみると、間違つて居ても返事をする者は、返事をせぬものより善い、といふことになる。蓋し間違つて居ても返事をする者が良いので、間違つてはと、それを慮れて返事も出来ない者は駄目なのだ。青年は、駄目な中でも良いからやつて見る、といふ度胸が必要だ。

一九一八年の革命に際しては、上王侯から下各地の師團長に至るまで、手を束ねて施す術を知らなかつた。奮起してやつてみようといふ人間が一人も居なかつたのだ。ドイツは今日外國から踏みつけにされても抵抗しようともせず、意氣地なく我慢して居るが、之とても、一部の者の云ふ如くドイツに武器の準備がない爲でなく、國民が不甲斐ないのだ。則ち、度胸がないからなんだ。今や國を擧げて氣が弱くなつて居るから、少しでも冒險だと思はれることだとすぐにやめて了ふ。併し人間の仕事するものは、仕事それ自身も大切だが、善からうと悪るからうと頓着なく、思ひ切つてぶつかつてみるところに意義があるのだ。ドイツの或る將軍は、五割一分の勝算がなければ動いてはならぬと言つ

た。世のなかにこんな臆病なことがあらうか。ドイツに革命の起つたのも、畢竟上に起つものが臆病であつたからだ。大事をとつて動き得ない人間は、思ひ切つた仕事の出来ない人間だ。善いと思つたら死を賭してやつてみるまでだ。胃腸は不治の病氣だ。ところで、この病にかゝる人間は、五割一分の望みがなければ、などと云つては居られまい。助かる見込が一分乃至半分でも、思ひきつて手術を受けるであらう。それでうまく行かずに死んだつて仕方がないのだ。之が思ひ切つて事をやつてのける人間の心持だ。

惟ふに、現代ドイツ人の怯懦なるは、畢竟學校教育の弊であつて、爲政家中一人として度胸のある者のないのも、幼い時から間違つた教育を受けて來た爲だ。

法儒と共に排斥さるべきは責任迴避だ。責任迴避の弊風も亦教育の餘弊であつて、學校に居るときばかりでなく、世の中へ出て来てもさうだ。而して議會政治の如き、最もこの責任迴避の連中に適した制度だ。ドイツは、小學校時代から進めることばかり上手な生徒が善いとせられるのだ。わるいことをして先生から脅かされると、直ぐに參つて了ふ。心に思つて居なくても、之からしませぬなどどわびる子供は善い生徒だとほめられ、わるいことをしたとは思はないと言つて頑張る子供は、未恐しいなどと云つて厭がられる。直ぐに卵を脱ぐ子は素直で、頑張る子は意地張な兒だといふのだが、ほんたうは素直な子より意地張の子の方が頼もしいのだ。

民族的國家の教育は度胸と俠氣とを鼓吹せねばならぬ。一旦引受けたら、どんなことがあつても頼んだ人を裏切らぬといふやうな氣象を、小さい時から教へ込むことが必要だ。

五八

一一、詰込主義と外國語

次は智的教育の方面であるが、學校の科目については次のやうな要領にした。

今日學校で教へて居ることは、九割五分まで無用なものが多く、生徒は勉強してもすぐに忘れて了ふものばかりである。則ち、生徒は役に立たぬもので惱まされて居るが、これからは無用の學科で生徒を苦しめるやうなことをやめねばならぬ。之が教育改正についての第一の要領である。今日の學校教育はやたらに用のない知識を詰込まうとすること右の如くであるが、殊に小學校や中學校の教育のやり方は、中途半端の役に立たないものであつて、多くのことが詰込まれるけれども、それを覚えて居て役に立たせるものは少數のものであつて、多數のものは學校で學んでも學校を出るとすぐ忘れて了ふ。それなら、それ程大事なことを教へるかと言ふとさうでもなく、専門にやつて、それで飯を食つて行かうといふには、今の小中學の教育では教つたことを皆覚えて居ても役に立たないのだ。小中學ばかりでなく、大學や専門學校を出て勤めて居る官吏をとらへて試して見給へ。學校では頭がいなくなるまで勉強させられて居ながら、之等の人々が三十五歳から四十歳になつても、學校に居て學

んだことをそのまゝ覚えて居る人間があるかどうか。かう言ふと或る者は反駁して喰つてかゝる。學校で教へることは覚えて居て役に立てる爲ではあるが、そればかりでなく、頭を練り、注意力を養ふ爲でもあるのだと。一應尤もだと肯けるが、判りもせぬことを澤山詰め込まれると、いらぬことばかりを覚えて居て肝腎のことを忘れて了ふといふ虞がある。澤山のことを詰めこむことが目的でなく、他日世のなかに出て、己にも又社會にも役に立つ知識を習得するのが學問の目的であつて見れば、多くのことを覚えても要を忘れるやうでは、教育の目的が没却されるとはねばなるまい。更に今日では、何百萬人といふ多くの學生が學校に居る時は、二箇國乃至三箇國の外國語を學ばせられるが、之を實際活かすものは極めて僅かのものであつて、大多數はその機會がないから、學校を出るといつか忘れて了ふ。之なども無駄なことである。例へば、十萬人の學生がフランス語を學校で教はつても、世のなかへ出てそのフランス語を生かして行くものは二十人あるかなしで、残りの九萬八千人は利用の機會がなく、いつの間にか忘れる人々である。十萬の學生が外國語の爲に費す時間は數千時間の多きに上る。而もそれが役をなさないのである。數千時間を役に立たぬ學科の爲に浪費するなどは、馬鹿げたことであると言はねばなるまい。或は外國語の習得は、一般教養の爲だと言ふ者もあるけれども、學科は生涯活用できてこそ教養にもならうが、僅か二十人もの利益を受けるといふだけで、九萬八千人のものが反つて迷惑をするといふやうでは、語學の詰めこみも考へものだ、と白はねばなる

五九

更に外國語の習得は教養の爲だといふけれども、拉曲語などと違つてフランス語をやつたとて頭が論理的になるなどといふことは断じてない。そんな役に立たぬ外國語を、骨折つて學ぶのは凡そ意味のないことだ。若しもそれでも尚、どうしても外國語をやらねばならぬといふことなら、細かい煩瑣なことをやめて、文法なり、發音なりその國語の骨格といふやうなものだけをざつと教へ込んで置くことにしたいものだ。その方が、むやみに詰め込むやうな教へ方よりもどのくらい善いか判らない。

さういふ風にして置けば、實世間に出て外國語を使ふ機會のないものはそれで十分だし、又専門にやりたいものは、學校で學んだものを基礎として、自分でも研究が續けて行かれるといふものだ。かくすれば、學生も時間の餘裕が出来て来るから、それを體力とか、意志の鍛鍊とか、私が前に挙げた修養の方面に用ゐるべきである。

二、歴史教育

歴史教育も亦語學と同じく、いままでのやうでは不可い。凡そ各國のうちで、ドイツ程歴史の研究に熱心な國民はないが、又ドイツ人程歴史を活用しない國民もない。歴史は過去の政治であり、政治は現在の歴史である以上、歴史教育は政治教育に資するところあるべきものでなければならぬ。遺憾

ながら、我が國の歴史教育は殆んどなつて居ないから、學生の頭に残つて居るものは、くだらぬ出來事の記録でなければ、英雄豪傑の名や、生れた年月日といったやうなものばかりで、治亂興亡の跡を達観して、その間に生ける民族の動きを見る、といふやうなことが更にならない。かく言ふと、不快な顔をする者があるけれども、嘘だと思つたら議會の辯論を聴いて見給へ。議員といふものは、少くとも中學校を出た人間である。なかには大學を出たものもあり、自らは國民の選良を以て任ずる者であるが、彼等が政治問題、殊に外交問題を論ずるときは貧弱さはどうだ。言ふことが殆んどなつて居ないではないか。彼等は歴史を讀み違へて居るのだ。學校で教へられた歴史の間違った教育が、彼等をしてとんでもない議論をさせるのだ。こんなことなら、始めから歴史などを學ばぬ方がどのくらい善いか判らない。

歴史教育で必要なるは、いらぬことを詰め込まずして、要領だけを授けることだ。さうすれば、學ぶ者も益を受けるし、社會の用にも立つ。歴史を學ぶのは、單に過去の出來事を知る爲でなくて、過去の經驗を未來に適用せんが爲である。歴史を學ぶのは、民族發展の原理をつかひにある。

歴史上の出來事を空に覺えて居るだけでは、歴史を學んだといふことにはならない。或者は云ふ、過去の經驗から未來の教訓を引き出すにも、細かい事實を研究する必要があるのだと。然りながら、細かいことを細々と研究するのは専門の歴史家のことで、一般の者には必要がない。我等は歴史の先

生ではない。我等の歴史を學ぶは、世界の大局を知り、政治外交の識見を養ふ爲である。史家たらんとする者は、細かいことまで立ち入つてせんさくした方が良からうけれども、我等には用がない。況んや、今日の歴史教育なるものは、之亦要領を得ざるものであつて、一般のものにはくだ／＼しきに過ぎ、専門家にはもの足りない。帯に短く、たすきに長い、やくざな代物だ。

六二

尙終りに一言したきは、今日の歴史は時代遅れだ、といふことだ。歴史は民族問題の観点から書き直されねばならぬ。之も亦歴史教育の改正に關聯して、閉却されてはならぬ大事なことだ。之を要するに、民族的國家にありては智育に關する方面では、教へることを成るべく簡單にして必要なものだけを授け、それ以上のことは専門教育に委ねる。一般の者は世のなかへ出てなくてはならぬものだけをしつかり覚え込むのである。それ以外に學びたいものがあるれば、隨意科として特殊の者にやらせれば良い。

かくの如くして科目を成るべく少くし、それに依つて生ずる餘裕の時間を體育や品性の陶冶や、意志の鍛鍊等に充用すべきこと前に述べた通りだ。

ドイツの教育は不備だ。中でも中學教育に至つては、多くのことが教へ込まれる辭に、世のなかへ出ては殆んど役に立たないものばかりだ。教育が中途半端だからだ。半端な教育では民族的國家の創成と發展を期することは出来ぬ。

一三、修身教育の要

次に智的教育の上に於て、同じく改むべき點は次の如し。

現代は物質文明の時代であるから、學校に於ても、數學、化學、物理といふ如き實科の科目に力を用ゐるのは異とするに足らぬ。技術と物理とが物を言ふ世のなかであり、日常の生活もこの二つを除いては考へられぬことであつて見れば、實科に重きを置くのも止むを得ないことも論を俟たぬ。然りながら、奈何に大切であるにもせよ、一般の國民教育までそれに没頭して顧みないやうでは危険である。國民教育は、科學的學問よりも、寧ろ修身に力を入れ、技術や物理のやうなものは基礎的なものにとどめ、専門にやらうとするものは、上級の學校で専門に研究するやうにした方が善い。世のなかで大切なものは人間であつて、技術や學問は第二である。物理や數學にのみ力を用ゐるときは、肝腎の人間が出来なくて、職工のやうなものばかりが出来ることになる。殊に歴史教育にあつては、迂濶なやうでも古ローマの歴史などは斷じて等閑に附してはならぬ。ローマ史の如きは、單り現代ばかりでなく、いつまで経つても廢らない貴重な修養資料だ。歐羅巴はいくつもの國に分れて居るけれども、ギリシヤ人ローマ人とは民族的のつながりを持つものである。國が分れ、時が異つて居ても、民族的のつながりを忘れてはならぬ。歐羅巴の文明は、ギリシヤの文明とゲルマンの文明との合流より

六三

生れたものである。而して現代の國際的闘争は、要するにギリシヤ・ゲルマン文化を維持せんとするの闘争なんだ。

繰り返して言ふが、一般の國民教育と専門教育とは區別せねばならぬ。而して今日の専門教育なるものは、殆んど金まうけを唯一の目的とするものであり、墮落の極にあるものなるが故に、金まうけ一方のわるい傾向を掣肘する爲にも、國民教育に於て修身の課目を大切にすることが必要である。況んや、商工業と雖も、國民に道德的基礎のないところでは繁榮しないものである。而して國民の道德的基礎といふのは、國民が物質的でなく、又利己的でもなく、國の爲に欣んで己を捨てるやうになつて、始めて固きを加へるのである。

一四、民族中心の愛國

當今の青年教育なるものは、個人の立身出世を目的とし、學校で授ける學問も、それに都合のよいものを網羅して居る。之は青年が學校を出てから、社會の有用な一員になる所以ださうであるが、その所謂「有用な一員」といふのは、世のなかへ出て、飯の食ひはぐれがないといふことに過ぎないのだ。笑ふべきの至りだ。更に國家に關する教育も亦成つて居ない。國家は民族生活の一つの形式に過ぎないから、形式だけをとりへて、青年の心を引きつけようとしても駄目だ。形式とは容器のことである。

あり、容器はいつか壊れるものだ。必要なるは容器のなかみだが、その中味がはつきりしないのだ。國家といふことを口にする者は多いが、國家の眞の意義を知るものは少い。それ故に、淺薄な愛國教育といふやうなことで、お茶を濁すやうにもなるのだ。戦前のドイツでは、王侯を神のやうに祭り上げて、それに身命を捧げることが、最も貴きこととせられ、ドイツ民族の偉大さといふやうなことに注意が向けられなかつた。王侯はあつたが、民族がなかつたのだ。従つて、大衆は肝腎のドイツ民族の歴史に無頓着であつたが、之がとんだ間違であつた。

國民が此の如くにして、事ある際に、心から奮起するが如きことは望んでも得難いことだ。之寧ろ自明の理だ。歴史教育にあつては、多くの人物を無雜作に並べ立てることをやめ、少數の大人物を抜き出し、それを中心として國民が團結するやうになすべきである。然るに、ドイツの教育はそれを忘れて居た。多くの人物のうちより、眞に國民的英雄たる資格あるものを選び、國民が等しく之を仰望するやうに教へ込まねばならなかつたのだ。ドイツの學校ではそれもやらなかつた。單り人物ばかりでない、古今の事蹟に就いても、わけもなく盲目的に事物を網羅することをやめ、ドイツの演じた偉大な事蹟を特筆して、國民のプライドを高めるに努むべきであつたが、遺憾ながら之もやらなかつた。恐らくは此の如き教育は偏狹な排他心を煽るものとして排斥されたのであらう。同じくパトリオチズムと云つても、尊王を中心としたものと、國民の矜持をもとしたものがある。尊王的パトリ

オチズムが穩當で、國民のプライドをもとするパトリオチズムは強過ぎるとも考へられたのであらう。尊王といふことで行けば、ホとなしくついて来るから御し易く、國民のプライドで行くと、國民はいつでも上の云ふ通りにはならぬ。上に引きずられてばかり居らず、時あつてか、下から上をひきずるやうなこともなる。尊王主義だと不平があつても泣き寝入りとなるけれども、國民的パトリオチズムは、一度勃發すれば勢の赴くところ、那邊まで進んで行くか豫測が出来ぬといふ危険がある。尊王を中心としたものでなく、國民を中心とした愛國は驛馬の如きものだ。誰が乗つても惟々として乗り手の意のままに動くといふことはない。乗り手が善ければ素直に走るけれども、わるければ振り落して下す。國民を中心とする愛國心にはこんな危険がある。王政時代の當局が、國民の心を尊王に向けて、眞に國民を中心とした愛國心に向けることを避けたのは此の爲である。平居事なきの際ならば之でも善い。然りながら、國際間に國をなして居る以上、いつ戦争が起るかかわからない。戦争が起れば十字砲火が地をどろかし、毒瓦斯の渦が戰場を開にするのだ。人々は生死の巷に立つて勝敗を争ふのだ。此の時に當つて、内に固き據りどころを持つ者でなければ、生命を賭しての働きは出来なない。ドイツ當局は、豫めこんな場合を考へて、平常から國民には動かさざる心の據りどころを與へて置かなければならなかつたのだ。それを與へて置かなかつた爲に、ドイツは敗れたのである。心の據り處とは、國民を中心としたパトリオチズムだ。尊王を中心としたパトリオチズムは弱い。

六六

世界大戦に於ては、國民はもはやカイゼルや王侯の爲に死ぬる氣持はなくなつて居た。而も國民中心の愛國心にも目ざめて居なかつた。ドイツの敗けたのはその爲だ。

ドイツに革命が起り、聯邦の諸王室がカルタの家如く倒れ去り、それと共に尊王の氣風は跡を拂つてどこにも見られなくなつてからは、歴史の教育は何の目標もなく、唯物を知るといふだけのものとなつた。共和政府は國民に尊王心のなくなつたことを少しも遺憾とはせぬけれども、然りとて、國民は共和政府の思ふやうにもならない。國民主義勃興の現代に於て、尊王などといふ古めかしいものが存立の出来る道理はないが、國民は共和國などといふやうなもの爲に、死んでも悔いなしといふ氣持にはなれない。ドイツ國民は四年半も戦ひ抜いたけれども、あれが共和國の爲になどといふやうなことであつたら、恐らくはあれ程永く國民は戦ふ氣にはなれなかつたであらう。之は論議の餘地のないことだ。

今日の共和國は、殆んど自らに存立の能力なきものである。それにも係らず、政權を維持して居るのは、聯合國の言ひなり次第に償金を拂ひ、土地を割いて居るからだ。共和ドイツは聯合國に受けが善い。聯合國から云へば、弱いものが強いものよりも御し易いからだ。それ故に、共和ドイツが聯合國に受けの善いといふことは、則ちドイツ國民にとつて害が多い、といふことだ。聯合國はドイツを搾取して、之を奴隸の地に置かんとして居る。而して共和ドイツの當局は、その手先となつてドイツ

六七

を擧取して居るのだから、聯合國にとつては、これ程重要な相棒は求めても他に得られない。共和ドイツが存立を續けて居るのは、こんな事情によるのだ。従つて、國民主義の教育などは、現在の政府に求めても無論駄目だ。

我等の企圖する民族國家は、民族存立の爲に戦ひ抜くものでなければならぬ。ドーゾ案の受諾などに依つて、僅かに存立を續けんとするやうな意氣地のないものであつてはならぬ。我等の民族的國家は、共和政府の疏かにして顧みざるところのものに依つて防護される。惟ふに、我等の目標とする國家は、その理想の高遠なるだけに、聯合國の壓迫は必ずや大なるものがあらう。之に對抗する手段は一にして足らぬけれども、そのうちでも、最も固い勝利の保障は、武器でなくて國民であり、數里に亘る長い要塞でなくて、愛國の至誠に燃ゆる男女の人垣である。我等は第一に民族を中心とした國民教育を欲する。

以上述べたところに依り、學校に於ては他の科目に就ても、次のやうな觀點から教育が施されねばならぬ。

則ち、歴史ばかりでなく、他の學科に於ても知識を集めるといふことでなく、國民の自尊心を養ふやうにするのである。世界歴史ばかりでなく、あらゆる文化の方面に於ても、ドイツ國民の自尊心を涵養することを主眼とするのである。この發明はドイツ人のなしたものである、かの偉業はドイツの

偉人のなしたところである、と言つてドイツ人の自尊心を高め、同時にドイツ歴史のうちから、最も傑出した偉人を選び出し、之を仰望的的として國民が團結するやうに青年を教育するのが、當今の急務だ。

かくの如くにして、學校でもドイツ人の自尊心涵養に重心を置き、當今の如く生半可な平和主義者や、デモクラシーなどを造らず、學校を出たら、頂天立地、頭のさきから足の爪先まで、がつちりとしたドイツ人として、社會に立つやうにしなければならぬ。

かくて、眞のドイツ人を養成するには、未だ頭の固まらぬ子供の時代から、次のやうに教へ込んで置くのだ。則ち、愛國は口で唱へるだけでは駄目だ。國を愛するものは國の爲に眞に身を捧げねばならぬ。それでなければ、ほんたうの愛國者といふことは出來ない。まうけが仕たい、損することは嫌だ、といふところに愛國はなく、階級の寄合世帯で國民的團結の缺けてるところに愛國はあり得ない。ウラーと叫んでも、萬歳と唱へても、それだけで愛國者といふことは出來ぬ。愛國者は民族の爲に身も心も捧げて悔なき者でなければならぬ。而も國を愛するには、愛する國が健全で誇るに足るべきものでなければならぬ。今日我が國では、貧困のドン底にうめいて居るものがあるかと思へば、貧深して放逸な生活を送る者も少からずある。國民の半身が放逸であつたり、足腰の立たないものであつたりしては、奈何にしても自分のからだの自慢が出來なからう。國民的矜持が持たれるには、先づ



七〇
社會組織の缺陷が排除され、國家は眞に一家の如く親和し、階級の隔てや、社會的不公正があつたりしてはならぬ。

此の如くにして、愛國心と社會正義とを調和した觀念を、幼い時から子供の腦裏に植ゑつけて置けば、自ら愛國的の市民が生れて来る。國民は互に相親和し、同じ國民的誇を以て結びつくことになる。頼もしい國民とはこんなのを言ふのだ。

現代は、愛國的の熱狂を排斥する。之は人間が無氣力になつて居るからだ。現代人は手荒いことをやる氣力がないが、又手荒いことが嫌ひでもある。併しながら、こんな人間は、大事をなすに足りない人間だ。見よ、國の東西を問はず、時の古今を問はず、凡そ我等の間に捲き起された驚天動地の偉業なるものは奈何にして成就されたか。その殆んど總ては狂熱の結果ではないか。あるものはヒステリックな熱情に依つたとさへ言ひ得る。若し熱したり、狂したりすることがわかつて、誰も彼も小廉曲謹で居なければならぬとしたら、乾坤一擲の事業などは世のなかに出来なかつたらう。

今や世界は、將に未曾有の大變革に遭遇せんとして居る。これは疑ひのない事實だ。唯疑がありとすれば、その變革に於て、アリアン人が勝つか、ユダヤ人が勝つか、それが問題となるばかりだ。來るべきユダヤ人對白人の衝突は、史上空前の大活劇となるべきこと必至の勢だ。ドイツ國民は、豫め之に備へねばならぬ。我等の民族國家は、その方針を以て青年の教育に従事すべきだ。

一五、民族的觀念の養成

以上述べたことは國民教育の方針として缺くべからざることであるが、そのうちでも最も大切なるは、民族觀念の養成であつて、極端に云へば、教育の趣旨は、民族觀念を子弟の頭へ刻み込むことである、と言つても善い程だ。民族の血は純潔でなければならぬ。決して混濁させてはならぬ。民族の血の純潔は、ドイツ文化向上の要件である。學校で子女に民族觀念を養はせようとするのはこの爲である。

生物は種族保存の本能を有するものである。而して種族は、血の濁れざることによつてのみ保存の目的を達する。血は大切だ。それ故に、どんな教育を施したとて、頭が良くなつて、體が良くなつて、血の純けつを喪つたら何にもならぬといふことにもなる。民族と血のことは、どうしても子女の胸に刻みつけて置くべきだ。

ドイツ人は、他國の文化の肥になる人間だと言はれる。外國へ移つて行つて本國を忘れ、移住した國の文化を肥すことで、一代を終ることを言ふのである。之は一人のドイツ人が失はれたと同じことになるのだが、今日の國民が、それを何とも感じないのは遺憾だ。他國の肥になり、平然として怪しまないのは、ドイツ人と他國人との區別を知らうとしない者であり、ドイツ人と他國人との區別を知

七二
らうとしないのは、ドイツ民族の血を軽んずるからであつて、此の如きは個人の損失ばかりでなく、ドイツ民族の大損害である。ドイツ人の血が、他の民族の血と雜るやうなことがあれば、雜ぜられた方は文化が向上しようけれども、奪はれたドイツ人の方の文化は低下して行くからだ。

此の如く、必要な民族的教育も亦最後の仕上げは、軍隊生活でなされるやうにしなければならぬ。この爲にも、軍隊教育の必要が再確認されることが必要だ。

一六、機會均等の教育

國民教育に於て、心身鍛錬はどうしても必要だ。それ故に、私はくたくたと述べ來つたのであるが、心身の修養と共に、人物の陶冶といふことも亦、民族的國家では是非とも考へられねばならぬことだ。今日では、高等教育を受ける者は良家の子弟といふことになつて居て、本人の才能といふものは多く問題とせられざる傾きがある。全然無視せられるわけでもないが、無視されないまでも、二の次三の次とせられるのである。之が間違だ。教育がなく、物を知ることが少くても、富豪や門閥の子弟よりも、田舎の百姓の子に反て天分の勝れたものがある。金持の子は學校で教育を受け、家にあつても優れた環境に居るから、成程學問もあり知識も豊かであらうけれども、天分のない者が少くないのだ。之を置き代へて、天分のある田舎の子供を彼等の地位に置いたら、素晴らしい才能を發揮する

に違ひないと思はれる。本來學問と才能とは別だ。この區別の最もはつきりと現はれて居るのは藝術だ。こゝでは、本人の生れつきの天分が物を言ひ、勉強や學問は役に立たぬ。親が金があらうと、宏壯な屋敷を持つて居ようと、天分のない子供はどうにもならない。之を事實に徴してみても、藝術界の天才には權門勢家の子弟が少く、古來の最も偉大な匠人は、最も貧乏な家の出であり、永く名聲を歌はれて居る名工中には、農夫の小作であつたものが少からずある。

此の如くにして、天才は門閥勢家に限らるるものでなく、寧ろその反對である。殊に藝術方面に於て然りであること右に述べた如くだ。然りながら、此の如きは單に藝術の領域ばかりでなく、他の方面でも同じことだから、爲政者は隠れた天才を世に出るやうにしてやるべきだ。それがなされないのは、時代の缺陷である。或者は云ふ、藝術方面では君の云ふが如くであらうが、どの方面でも悉くさうだとは言はれぬと。世には猿に藝を仕込むに巧みな者がある。頑迷無智な犬や猫にも、いろ／＼な藝當を覚え込ませる。人間の教育にも之に似たものがある。人間に機械的な知識を詰め込むことがそれである。而して、それで人間が物を伶俐に覺えることは事實である。然りながら、犬や猫が藝をするのは、犬や猫に頭がある爲でなく、外から加へられるのである。之と同じことで、どんな人間でも、教育の力でいくらか學問は出来るやうになるが、畢竟は猿が藝を覺えるのと大した相違はない。頭が善いといふ人間でなくても、先生がついて居て犬猫を仕込むやうに仕込んだら、普通以上の物識

りにはなれる。併しさうして得た學問は、要するに死んだ學問で役に立たない。死んだ學問をして居る人間は、生きた辭書といふことは出来るかも知れないが、こんな男に限つて、まさかの時には狼狽するばかりで、難關を切り抜けるだけの思慮も分別も出ない。他から指圖されねば、自分では何にも出来ないといふのも、こんな人々の弱點だ。機械的に學問を詰め込まれて来た人間はやくざものだ。何をやらせても役に立たぬ。こんな人間の用ゐどころと云へば、先づドイツの役人ぐらゐなものであらう。

七四

天才は尊ぶべしだが、天才はざらに出るものでない。これは當然のことだ。又學問も無駄ではない。死んだ學問でも、才のあるものが之を利用すれば、生きたものになる。それ故に、學問は馬鹿にすることは出来ないが、學問だけでは用をなさぬ。天分の才能と學問とが結びついて、始めて立派な人間も、生きた仕事も出来るのだ。

生れながらの才のないものに、外から學問を詰め込むのは賢明なことではないが、當代は此の點に於て、大きな間違をなして居る。つまりねことだが、例をとつて話して見よう。近頃の繪入雜誌などを見ると、黒奴が學問をして辯護士や、學者や、牧師になるといふやうなことが書いてある。中には音楽家になつて、名を挙げたりするやうなことも書いてある。馬鹿なドイツ人は之を見て、成る程教育の力は偉大なものだ、黒奴でも、教育に依つては白人に劣らぬ才分を發揮するものだ、と云つて

恐しく教育の威力なるものを三嘆する。之が抑も笑ふべきことだ。ユダヤ人は人類平等などと言つて、民族の差別を拋棄せんとして居る。教育に依つて黒奴でも學者政治家になれるなどと云ふのは、ユダヤ人の宣傳に過ぎないのだ。そこに氣がつかず、つまり繪入雜誌などを見て感心してゐるのは、正氣の沙汰でない。そればかりでなく、猿に近い蠻民を辯護士や學者に仕立てるといふこと自體が冒瀆だ。數十萬、數百萬の白人が、プロレタリアの苦しい生活をなして居る間に、黒奴を辯護士や牧師に仕立てて威張らせるなどは、假令それが出来たとしても、神の意志に反するものではあるまいか。而もその教育なるものも、眞實の學問でも何でもない。黒奴の教育などは、犬猫に藝を仕込むと同じことなんだ。それだけの親切があつて、黒奴に仕込むだけの努力を、白人の子弟の教育に用ゐたならば、その効果は蓋し、千倍、萬倍の大なるものがあらう。

今日我等の間では、富家の不肖な子弟が高等教育を受くるに反し、天分があつても、貧乏なるが故に教育を受けることの出来ないものが少くない。慨嘆の極みである。之が爲に、國家國民の損失は量り知られざるものがある。近來めばしい發明發見と云へば、アメリカでなされたのが多い。之にはいろいろの理由もあらうが、彼の地では、下層民の子弟でも高等教育を受けることが容易である。その點は、歐羅巴よりも貧乏人の子弟により都合よく出来て居る。アメリカに素晴らしい發明、發見の出来るのは、その爲であると云へよう。

七五

發明は學問だけでは駄目だ。天分が物を言ふ。ドイツでは之を考へない。善いノートをとるだけが總てだ、とされて居る。之も遺憾千萬だ。

民族國家は、此の點にも意を用ゐねばならぬ。國家は一つの階級に私することなく、社會の各層から天分の優れた者を抜き出して、有用の地位に登れるやうにしてやらなければならぬ。それには、小學校で一般の教育を施すばかりでなく、才分ある者は上級の學校へ行つて、高等の學問が出来るやうに取り計つてやらねばならぬ。階級や貧富の別を問はず、見込のある者は悉く大學まで行けるやうに道を拓いてやるのが肝要だ。かくしたならば、やくざな議會も、役に立たぬ物議りの集會所とならず、爲政家のうちにもしつかりした指導者が出来ようといふものだ。

下層階級のものに高等教育の門戸を開放せよ、といふ私の主張には、次のやうな理由も存する。どこの國でもさうだが、殊にドイツでは、インテリと云へば彼等だけの殻を造り、そのなかに閉ぢ籠つて居る爲に、一般民衆との間に生きた連絡がない。これには二つの弊害が伴ふ。一つは、その爲に大衆に對する理解と同情がない。本來上層階級は、下のものと一つになつて生活して行くべきものであつて、そこに國家の意義もあるのだが、今日では、上層の人々は、いつの間にか離れて了つて、下の方のものの感情が分らなくなつて居る。上層の人々には、國民大衆の氣分が判らなくなつて居るのだ。之が弊害の一つ。次は下のものと隔離した生活を送る爲に、インテリはいつのまにか氣も心も弱

七六

くなつて居ることだ。度胸といふ點になると、上層階級のものでどうしても下層のものに及ばないのは事實だ。ところで、學問はドイツでは有り餘る程進んで居るのであつて、足りないのは度胸なんだ。世界戦争でドイツは敗けた。之は外交の準備が十分でなかつた爲でもあるし、軍備が充實して居なかつた爲でもあり、ドイツ側に種々の手落ちがあつたからだが、畢竟之とても當時の政治家に學問のある者が少かつた爲でなく、學問のあり過ぎるものが多かつた爲である。學問のあるといふ人間は、多くはやらせて見ると無能で、物は知つて居るが度胸がない。ドイツはその爲に敗けたのだ。世界戦争は、ドイツにとつて興廢の運命を賭した戦争であつた。然るに、之を率ゐる當時の宰相は、哲學をひねくつてゐるやうな弱虫であつた。ドイツ國民は、此の弱虫の下に興廢を賭するの戦争に臨んだのだ。惨敗に終つたのは寧ろ當然と云へよう。若しベートマン・ホルウエヒの代りに、野人でも膽玉に毛の生えたやうな男を推し立てて進んだら、戦の結末はあんなみぢめなことにはならなかつたらうと思はれる。そればかりでない。十一月の革命だつて、始めに叩き潰して終へば、大事に至らずしてすんだのだ。それをあれ程な大きな運動にしてすつたのも、畢竟爲政者の間に、頭が良くても度胸のある人間が居なかつた爲だ。

國民のうちの才分のある者を、身分階級に係らず伸ばして行く教育方針については、カトリック教會の組織は大に参考とすべきものがある。カトリックの坊さんは無妻主義であるから、後継者は己の

七七

子供といふわけには行かぬ。己の身内とか、又は身分の同じものとか言つても居られぬ。どうして
も、廣く庶民の間から後継者を採用するといふことになる。カトリックの宗派には、恐しい底力があ
る。その力の源はこゝにあるのだ。カトリックの宗派にはいつて、高僧などの地位に進むものには、
社会的に最も下の方から身を起したものが少くない。かくてカトリック教會では、神父の補充は常に
下層階級のものに依つて行はれるのであるが、之あるが爲に、教會でも下層民に親しみがあつて、下層
のものも亦、カトリックの教會だと親しめるといふところがある。之は教會の強みである。更にささ
に言つたやうに、貧乏人の方が、金持や教育のある者より意志が強い。カトリック教會には貧民出の
ものが少くないから、坊さんになつても弱いことばかり言つては居らぬ。皆強い。之も亦此の宗派の
根強く勢力ある所以である。

七八

今日の支配階級は、下の方から絶えず新しい血をとり込むことが必要だ。之には、教育の方面で貧
民の子弟が伸びるやうにし、國家としては才あり能ある者には學問をさせて、國家の爲に働けるやう
にしなければならぬ。之が政府の務だ。國家は官吏を食はせる爲に存在するのではない。官吏の務と
云へば、才能のあるものを引き立て、良い官吏に仕立てて行くのも忘れてならないことだ。之は官吏
ばかりでなく、他の方面も亦同様であつて、不能者が退き能者が進むところに國としての強味もあ
る。天分の等しい二つの國民が競争するしたら、能者がところを得て居るものが勝を占め、才能よ
りも階級や地位がものを言ふ國の方が負けるにきまつて居る。之は疑のない事實だ。

一七、労働の意義

尤も、私の言ふことは、今日の社會では行はれさうにもない。例へば、こゝに高官の息子と職人の
息子とがあるとて、一人は無能であり、他は有能であるとしても、職人の息子を役人にして、役人
の枠に職人になれと云つてもそれは無理だ、といふであらう。今日の如く、職人といふものを、社會
的に劣つたものと考へる時代では無理であらう。それ故に、民族國家にあつては、先づ労働といふも
のに就ての、誤つた觀念から改めてかゝる必要がある。それを改めるのは容易なことでない。或は百
年も、二百年もかゝるかも知れないが、教育の力で手先の労働を卑しむと云ふ弊風を一掃せねばなら
ぬ。之には職業に高下をつけず、仕事のよしあしで人の値うちをさめるやうにすることが必要だ。つ
まらぬものを書いて居ても筆の人間だから偉くて、頭の良い人間でも機械工が卑しめられるといふ世
のなかでは、之も言ふべくして行はれないことかも知れぬが、白い手の労働者が偉くて、筋肉労働者
がつまらぬものだといふ考へ方は、誤れる教育の結果であり、昔にはなかつたことだ。労働に差別を
つけるのは、現代物質文明の病的な一つの現象である。

労働には二つの方面がある。物の方面と心の方面とである。物の方面とは労働の效用である。此の

七九

八〇
點では、效用の高いものを多く造るものが良くて、效用の低いものを作るものが劣つて居るとせられる。之は専ら労働の效用を標準としたもので、效用の多いものを作り出すものは良い報酬を受け、然らざるものは報酬がわるいといふことになる。併しながら、労働には心の方面がある。發明家の仕事は素晴らしく、職人の手先の仕事はつまらぬけれども、國民全體の生活から云へば、發明も大切だが、職人のつまらぬ仕事もなくてはならぬものである。労働といふ以上、仕事の效用は重きをなすべきだが、労働に處する心持、則ち労働の心の方面も亦無視してはならぬ。労働の心の方面とは、人々が各自の持場に於て最善を盡すといふことである。労働の眞の意義は寧ろ此の方面にある。

民族國家にあつては職業の高下を論ぜず、能に因つて職を興へることを理想とする。ところで、各自の才能なるものは天分であつて、教育に依つてはいかんともし難きものである。則ち、人の性質は所謂天の賦であつて、人間の力でない。それ故に、學者の天分あるものが學者になつても誇るべき理由なきが如く、桶屋の天分のあるものが桶屋になつたとて毫も恥づべきでない。人は社會から委ねられた職業を忠實にやり遂げることが肝要なのだ。蓋し、職業はそれ自身が人生の目的でない。職業は人間が生きる所以の手段だ。人間が生きる所以とは他でもない、精神的向上である。而も我々が精神的向上を遂ぐるには、國家といふ土臺がなくてはならぬ。吾人は國家といふ文化のわくのなかにあつて、始めて精神の向上も達成される。之を思ふと、國家は大切であり、國家を維持する爲にはどんな努力をも惜しんでならぬ。ところで、國に盡す方法は人に依つて異なり、千差萬別であるが、誰でも身分地位職業の奈何を問はず、力に應じて報國の誠を致すことが一番大切なのだ。それ故に、此の心のある者は良い市民で、此の心のないものは悪い市民だ。従つて正直な職人は貴く、人の上に立つる役人でも、國民のパンを盗んで居る碌盗人は卑しむべき人間だと云ふことになる。同時に國家が身分に依らず、才能に依つて職を授けるやうになれば、出来ない仕事を強ひられるといふ無理なこと

のなくなるのも勿論のことだ。

一八、形式ばかりの普選

現代は普通選挙の世の中であり、又盛んに権利の平等などと騒がれて居るが、その意味を知つて居るものが少い。蓋し、人々のいふ平等は、貧富貴賤の外部の形式についてであつて、肝腎の心の平等といふ點を忘れて居る。貴いのは形だけの平等でなくて、心の平等である。故に、若し権利の平等を云ふならば、國民各自が平等に己の職務に忠實であるかどうかの吟味が必要なのだ。社會的地位の差別などは、始めから問題とすべきでない。

願れば、報酬の多寡や、身分の高下を以て人の値うちを定める現代にあつては、私の言ふことは耳へ入るまい。然りながら、世間の無理解などは、決して我等の所信を捨てさせる力にはならない。現

代は腐敗して居り、病的である。之を清め、之を治すには、病患の原因をあかるみへさらけ出すだけの勇氣が必要だ。ナチスの運動は、新しい人生觀の上に立つものだ。この新人生觀の使徒たるものを國民のうちより抜き出し、之に組織を與へるのがナチス當面の務である。

八二

一九、理想と現實

人或は曰はん、筋肉労働の卑しめられるのは、仕事が低級で報酬が少い爲であり、労働者の子弟の學問の出來ないのもその爲に過ぎないと。一應道理である。さればこそ、我等は將來労働報酬に餘り多くの差別をつけてはならぬといふのだ。かう言ふと論者は更に言ふであらう。人々の報酬に差をつけなくなつたら、將來大きな仕事をやるものがなくなるであらうと。それは杞憂だ。金で仕事をしようといふのは、現代の病弊である。若し金の多寡が仕事をさせる唯一の要因であつたなら、恐らくは人間の社會に、今日のやうな文化は生れなかつたであらう。古來の大發明、大發見、大事業は、金を命とした人々に依つてなされず、富を捨てた、清貧な人々の手で成就されたものだ。

今や世を擧げて金の前に平伏する。併し、いつかは金を崇拜せずして、金よりもつと貴いものを拜むやうな時が來るであらう。現在では金や名を目當にして、その爲に大きな仕事をしたのもないではないが、そんな人々に依つてなされた仕事は、多くは有つて益なく、なくとも良いやうなものばかりだ。

りだ。

人々の金を欲しがるのは、生きる爲だ。然りながら、人間が此の世に生れて來て食つて行けないといふ道理はない。將來は國民誰でも食つて行けるといふやうな時代にしたい。之がナチスの理想だ。それかと言つて、人間は唯食ふために生きて居るといふやうな考を持つたれるのは困る。仕事は異なれば、仕事に對する報酬も一つといふことは許されないが、眞面目に働いて居るものは、一人として食ひはぐれないやうにしなければならぬ。

或者は更に言ふ、君の説は空論だ。現實の世界では到底行はれぬことだ。止め給へ。

我々とても、一つの缺陷もない理想的な時代が直ちに實現されるものとは思はない。然りながら、社會に缺陷のあることが判つたら、取り敢へずその缺陷を除くべきだ。弱いところがあると判つたら、それを克服して、目差す目標に邁進すべきであらう。世の中は思ふやうには行かぬ。やつて見たら、意外な障害も出て來るであらうが、それを畏れて居てはならぬ。先づ理想の地を目がけて進むのだ。間違つた判決が一つ二つあつたとて、それで裁判制度を廢するわけにも行くまいし、藥が良くないと言つたとて、病氣のなくならざる限り用ゐるわけには行かぬ。失敗するかも知れぬと云つて、手を束ねては居られぬ。先づやつて見るのだ。

世のなかには信念が大事だ。我々は決して信念の力、理想の力を馬鹿にしてはならぬ。世界大戰に於

八三

八四
て優勢な敵を相手に華々しい戦の出来たのは信念の力であつた。仲間のうちで、我等の運動に不安を感ずるものがあつたら、あの時のことを思ひ出せ。ドイツ兵が戦場で欣んで死んだのは、パンの爲でなくして祖國愛の爲であつた。祖國の偉大さを信ずる爲であり、國民の面目を考へた爲であつた。而してその信念のある間はドイツ兵も強かつた。弱くなつたのは理想を捨て、革命の徒の並べ立てる物質的な福利に耳を傾けるやうになつてからだ。而して、その結果は、今日見るが如きみぢめな國民の生活だ。

當今の共和ドイツは、實利的で算盤のうまい人々が政治をやつて居る。ナチスは理想に生きる國家の建設を目標とする。

第三章 國民と准國民の卷

一、國民と外國人

今日誤つて國家と稱せられる組織は、人間を二つの種類に分けて居る。則ち國民と外國人とである。國民とは出生又は歸化に依つて公民権を享有するものを言ふのであつて、外國人とは他國にあつてその國民と同じき公民権を享有するものを云ふ。此の二つの者の間にどちらともつかぬものが一つある。所謂國際的無籍者で、どここの國にも籍がなく、どこへ行つても公民権のなきものである。

公民権あるものは、上にも述べたる如く、その國に生立たるものが出生に依つて自動的に與へられるのであつて、民族の奈何は多く顧みられない。ドイツの植民地に居た黒奴がドイツ本土へ移つて來れば、その子供はドイツの公民権を與へられる。同様にユダヤ人でも、波蘭人でも、或は又アフリカの土人でも、アジア人でも、ドイツで生れたものは無難作にドイツ人となり得る。

ドイツ人となるには、出生の他歸化に依るものがある。歸化には多少の條件がある。犯罪者でないこと、政治的危険思想を有せざること、歸化すべき國家に厄介をかけざること、等である。此に厄介といふのは、無論財政的に政府に負擔をかけないといふことである。これなどは誠に馬鹿げたことで

あつて、算盤ばかり弾いて居る國家なればこそだが、眞實の國家ならば、もつと考ふべきことが他に
ある筈だ。今日では、財政上の負擔にならなければ善いといふばかりでなく、金のあるものなら、政府
が好んで歸化させるといふ傾向があり、それが民族團結の上にとんな影響を及ぼすか、などと云ふ
とは少しも考へない。

八六

二、外國人の歸化

外國人がドイツ人になるのは、恰度自働車倶楽部の會員となる程無難なものである、則ち歸化を
希望する者が請願書を提出すると、當局ではそれに査證を與へて公民権を賦與してくれるのであつて、
その日から黒奴が一人前のドイツ人となるのである。奇怪千萬なことだ。

黒奴がドイツ人になるなどと云ふことは、當に香具師の用品ともいふべきものである。今日この手
品を行ふものは各國の元首であるが、黒奴をドイツ人にするには、天と雖もなし得ざるところであ
る。天の難しとするところを、人間がわけもなくやつてのけるのは不思議なことだ。當局の者が少し
筆の先を動かすと、黄色のアジヤ人が、一朝にして押しも押されぬドイツ人になるといふから可
笑しい。

歸化を許可する際に民族の關係を無視するばかりでなく、肉體の點をも全然顧慮しない。梅毒で、

づれかゝつて居るやぐざものでも、貧乏人でなく政治的に危険な人間でさへなければ、現代の國家は
平氣で歸化を許すのだ。

此の如くにして、國家と稱する組織は毎年體内に毒素を吸収し、自らその害に惱んで居る。

次に、國民と外國人との區別が、之亦大ざつばである。則ち自由に官公職に就くを得ること、兵役
に従事すること、選舉被選舉の權を有すること、之等の權利義務を有するものが國民であつて、それ
を有たないのが外國人である。外國人と國民との區別は之だけに過ぎない。何となれば、生命財産の
保護、身體の自由などは、外國人國民均しく享有するところであつて區別がない。區別がないばかり
でなく、外國人なるが故に、反つて多く自由の許されて居るものさへある。少くとも、今のドイツ共
和國ではさうだ。

こんなことを言つたら、嫌がる人間も少くなからうと思ふが、今日のドイツ程歸化の手輕に出来る
ところはない。此の點に於て、聊かでも注意を用ゐて居る國が現在一つある。それは御自慢のドイツ
共和國でなくて米國である。あちらでは、健康のわるい者の移民を原則として禁じ、又ある民族には
歸化を許さぬことになつて居る。これは民族的國家の目ざめとして當然なことだ。

八七

三、國民と准國民

來るべき我等の民族國家は、人民を國民、准國民、外國人の三つに分ける。而してこゝに准國民といはるる者は、官公職に就くことも出來なければ、選舉、被選舉の權利も與へられない。

同じくドイツ人と云つても、異民族のものは准國民にはなれるが、國民にはなれないのだ。それ故に、又此の種の准國民なるものは國籍を離脱して、所屬民族の國家の公民に歸るべきものである。而して外國人は、他國に於ける准國民であつて、同じく國民でないこと勿論だ。

ドイツ人にしてドイツに生れたものは、小學校の義務教育を終へ、民族的自覺を與へられ、小學校を出てからは同じく國家の命ずる體育を終へ、而して後軍隊に入る。兵役は一般徴兵制で奈何なるドイツ人でも兵役を免がれることは出來ぬ。而して公民權は軍隊を出たもののみ與へられるのだ。公民證は極めて大切なものであつて、之さへあれば、公民たるものあらゆる權利が賦與される。之は當然のことである。國家は同じ國民と云つても、國の干城たるべき眞の國民と、己の爲にのみ生きて居るものとの間にはつきりした區別を設けるべきだ。

公民證を授ける場合には、同時に國家國民に對して忠誠の誓をさせる。而して、ドイツ國民は公民證を基礎として團結し、その間に職業、身分、地位、貧富の區別があつてはならぬ。ドイツ人は、外國の王たるよりも、假令煙突の掃除夫でも、ドイツ國民であることを誇りとするやうになるのだ。

國民は、外國人に對して優越的地位にあること勿論だ。國民は、國家の主人なるが故だ。ドイツの

公民は此の如く貴きものであるから、従つて又、その義務も重く、破廉恥漢、犯罪者、賣國奴等は、一旦公民權を得ても、何時でも又剝奪され、准國民の地位に逆戻りさせられる。

ドイツの子女は准國民であり、結婚に依つて國民となる。但し、職業婦人でも、公民權を賦與せられることが出来る。

第四章 人材主義の巻

一、民族本位と人物本位

民族的國家の使命が、國家の干城たる人物を育成長養するにありとすれば、教育に於て有用なる人物を作り出すことに力を用ゐるのみならず、國家の組織、制度をも亦それに適應したものに改編しなければならぬ。

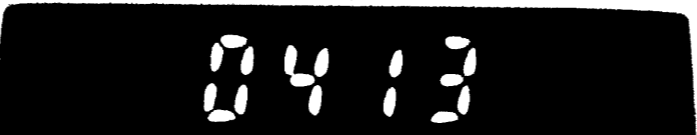
マルクス主義にあつては、人間は誰でも同じだ、異つたところがないものだ、といふ。併し、私は民族に優劣あるが如く、同じ民族の間でも、個人の間にも優劣の差が存するものと思ふ。同じくドイツ人といつても性能は千差萬別である。人間は決して平等ではない。それ故に國民のうちでも、特に民族主義の主張に必要な人物を拔擢し、驥足を伸すことの出来るやうにするのが、民族國家の任務である。

限りなく多い國民の中から、真に有爲の人物を發見し、登用して、常人のみならず、國家の爲に腕を發揮させるのは、言ふべくして容易なことでないが、政府としては全力を盡してその途を講ずることが必要である。

ナチスは民主的無差別平等の思想を排撃し、最も優れた民族に此の地球を持たせんとするものである。これ則ちマルクスの民主主義に對するナチスの貴族主義とも稱すべきものである。ナチスは此の原則を民族間の關係に適用するが故に、勢ひ同民族のうちにあつても、國家は國民中最も優れた人々の手に依つて運用されねばならぬものとする。ナチスはかくて貴族主義であると共に、多數決主義の思想を排し、人物本位を主張するものである。

二、精神的覺醒が第一

若し、ナチスの企圖する國家は、他國と異つた經濟機構を有せんとするものである、則ち貧富の差を矯正し、勞働大衆をして生産に關し、もつと多くの發言權を有せしめ、賃銀報酬に餘り大なる差をつけざること、等を以てナチス國家の理想なりと信する者があれば、それは又とんだ皮相の見に囚はれたものと云ふべく、始めからナチスの信條を知らざるものである。右に數へ上げた諸項目は大切ではあつても、國家存立の保障となるものでない。況んや、之に依つて國家の大をなさんとするに於てをやだ。經濟生活の機構の改善は、單に外部の形式である。外部の形式の改造を以て満足せんとする國民は、激しき國際場裡の競争に於て、斷じて勝者たるを期し得ない。經濟生活の公平の如きは正しいことであり、當然なされねばならぬことではあるが、それが外部の改革に止まる間は、ほんたうの



大改革を望むことは出来ぬ。國家の根本的改革は、國民の精神的改革から始められねばならぬ。國民の心持が根本から改まつて、こゝに始めて外部の生活の改革が達成される。

九二

三、文化發展の動力

以上述べたところをもつと解り易くするには、もう一度人類文化發展の動因に就て考へてみる必要がある。

人間が他の動物と異つて居る點は、發明の才の勝れてゐることである。發明の初歩は、わなや陷阱を設けて動物を捕へることであつた。之等の發明はその後廣く古く用ゐられて居り、今日では最初に發明した者が何者であつたかは詮索の由もない。單り人間のみでなく動物のなかにも、人間の詐計に似た或る種の巧みな働きを持つて居る者がある。之も亦我々はその起原がわからぬ爲、動物本能と云つたやうなことで片をつけて居る。

然しながら、苟くも人間が萬物の靈長たる所以を解する者ならば、人間の詐計は最初に之を工夫した者があるに相違ないことを信ぜぬわけにはゆかない。例へば動物でも、或る種のうちで、頭の良いたものが偶々工夫して考へ出したものがあると、他の者がそれを模倣し、次第に仲間の間に廣がつて年處を経るうちには發明したものが忘れられて種全體の本能的な動作だと考へられるやうになるのだ。

此の例は人間に就いて見ると更に明瞭である。吾人が今日、他の動物と闘ふに當つて用ゐる詐計は、始めに之を工夫した人間があつて、それが廣く仲間のうちに傳はり、以て今日に至つたものである。

陸軍の操典のうちでも、今日では何の不思議もなく、一般のものが之に倣うて便宜を得て居るものが多いけれども、之とても、もとは之を發明、工夫した最初の人間があつたのであつて、それが數百年、數千年の間に、一般人の本能的なものやうになつたのだ。

人間の始めの發明としては、第一に石を武器として使用したことを挙げねばなるまい。次で、他の生物を捕へ來つて、己の用に供することを考へた。之が原始的人間のやり出した第二の發明である。かくて動物や人間を、家畜や奴隸として使用するやうになつてからは、人間の發明が續々殖えて、今日見るが如き發明全盛の時代となつた。ところで、現代の發明は時代が新しいだけに、發明した人間がはつきり判つて居る。今日我等の周圍に見る發明は、天才の頭から生れたものでないものは一つもない。之等の發明は人類を向上せしめ、文化の發展を促進せしむるものであるが、石の武器や、弓矢が、森の中で獸を逐うた原始人の生存闘争を有利ならしめた如く、形は異つて居り、組織は精密になつて居ても、今日我等の目の前に見る發明、發見は、總て之亦我等の生存競争の武器となるべきものである。我等は之を用ゐて、地上に於ける我等の覇權を確立すべきである。

九三

四、人材登用の急務

九四

かくてあらゆる発明は、個人の才能より生れるものである。而して欲すると欲せざるとに係らず、之等の人々は人類の恩人であり、周囲のものは彼等の発明を利し、生存競争の武器として使用するのである。

斯の如くにして、今日の文化は多くの個人の天才的発明に依つて進歩して来たものであるが、天才の発明を具體的な器械や物に仕上げる働きも亦、同じく個性の特殊の才能に依るものである。一般大衆は発明もしなければ、発見もしない。考へもしなければ、纏めることも出来ない。總ての発明発見は、個人則ち個性物の頭から生れる。

之等の人々は、何れも世に云ふ賢能の士である。凡そ賢者を尙ひ、能者を擧げて、手腕を發揮させ、全體の福祉を増進させるやうな組織を持つものは良い國家であり、良い社會である。物心何れの方面たるを問はず、発明は人に依つてなされる。それ故に、全體の爲に、その人物を活かして使ふことが國家社會の最大の任務である。否、單り賢者能者をしてその手腕を發揮せしむるに止まらず、國家その者の組織も亦、賢能者の手に依つて動くものでなければならぬ。かくて始めて、器械的な國家から、有機的な生命ある國家となることが出来る。國家の機構に於ても、大衆本位を捨てて人物本位

をとり、人物が上に居て大衆が下に居るやうにしなければならぬのだ。

それ故に、國家は人材が大衆の間より頭を出さんとする時、之を妨げざるばかりでなく、百方之に便宜を與ふべきである。人類の發展に必要なのは大衆でなくて人材である。人材は我等人類の恩人だ。この恩人を尊び、賢を擧げ、能を使ひ、思ふ限り手腕を伸ばさせるのが國家全體の利益である。而して國家も亦、有爲の者が上に立つて、始めて完全な運用が出来るのだ。國政の運用だつて、優れた個人の手に俟たなければならぬことは再三述べた。不肖者が上に居ては國が治まらぬ。無能者が局に居ても駄目だ。大衆が跋扈したのでは、國家は尙更治まらない。

五、人物の淘汰

人材の登用は優勝劣敗の關係に依つて決定せられるのである。

この競争に於て、多くのものは倒れ、最後迄闘ひ續けて選ばれた者となるのは、僅かの少数者である。優勝劣敗の自然淘汰は、思想界でも、藝術界でもさうであり、經濟界でもさへ淘汰作用が行はれて居る。只當今の經濟界では、それが幾らか公正に行はれないといふだけのことだ。行政方面及軍隊でも同じことだ。ここでは、大衆よりも人物が重んぜられ、能者は不能者の上に立つこととなつて居る。之は人材本位とも云ふべきものである。然るに、單り政治方面だけは人物本位が行はれない。人

九五

類の文化が、天才的個性の所産であるのに、單り國家の政治的生活に於て人材主義が閉却され、多數決主義がものをいよのは奇怪なことである。

九六

今日國家各般の施設の弛緩は、多數決主義の餘弊である。而も各國に多數決主義、大衆主義を誘引し來つたのはユダヤ人であつて、ユダヤ人は之に依つて寄生して居る國の政治を擾亂せんと企てたのだ。

六、大衆本位はユダヤ人の陰謀

人間生活の各方面を通じ、人材を抑へて大衆に幅を利かせようとするのは、ユダヤ人の陰謀である。大衆本位の、政治方面に現はれたのは代議政治であつて、上は廟堂の高きより、下は郡會村會に至るまで、今日では投票政治に惱まされて居る。而して大衆本位の、經濟的方面に現はれたのが、労働組合運動である。労働組合は、労働者の利益とならず、世界的覇制を夢みるユダヤ人の傀儡となつて居る。

蓋し、經濟界産業界が單り労働大衆の左右するところとなるに従ひ、國の經濟は破壊せられざるを得ぬ。労働者の利益を計るよりも、工場支配を目的とする工場委員制の如きものも、之亦同じく、國家經濟を破壊するの指手段である。此の制度は、工場及惹いて國家全體の生産を破壊するが故に、

それに依つて損害を蒙るものは、畢竟個々の労働者である。理論は奈何にあらうとも、労働者の享有する財が少くなるやうな組織は、良い經濟組織といふことは出來まい。

マルキシズムが、大衆本位の理論に依り現在の經濟組織をうまく引きついで行けるとしても、それだけでは問題への解答にはならない。大衆本位の理論の得失は、現在あるものを引きついで行けるといふことだけでは決せられぬ。寧ろ大衆主義のユダヤ人に今の我々のもつ文化のやうなものが再び創り出せるか否かを問題とすべきだ。ユダヤ人に今の我々の文化を創り出す力がなく、それを受けつぐだけとあつては、マルキシズムも知れたものだ。

ところで、ユダヤ人にこの力のないことは、殆んど試験済みだ。ユダヤ人には、獨創の文化もなければ、獨創の經濟組織もない。加之、ユダヤ人自身が大衆主義から人物本位に轉向してゐるところが少くない。

斯の如くにして、マルキシズムとナチズムとの根本的相違は、前者が民族平等、人間平等説を執るに反し、後者がアリアン民族の優越を主張し、アリアン人の國の内では人材主義を主張する點にある。

若し我等の同志にして、ナチスの立場を忘れ、或は國家の形式的改革に終始し、甚しきに至つては大衆に媚びんとするが如き態度をとる者があるならば、我が黨は、一朝にしてマルキシズムと毫も選

九七

ぶところなきものとなるであらう。ナチスの人生観や信条などは、天下の笑草となるに過ぎなからう。今日の既成政黨には、マルキシズムの毒素が大分潤み込んで居る。人材主義を放棄して、大衆本位に移るやうなことがあつたら、ナチスも亦同じくマルキシズムの毒素に酔はされたのだ。
ナチスの國家は人材を擧げて手腕を發揮させ、國家全體の能力を高め、それに依つて國家の福祉を増進せんとするものである。
人材登用に依る國力の發展は、則ち國民の各の分け前を豊かにする。

七、議會は諮問機關

ナチスの國家には何れの方面でもさうだが、殊に議會の多數決主義を排除し、力量手腕ある政治家の活動を期するものである。
以上述べたところを要約すると、次の結論が生れる。曰く、
國民のうちで、最も頭の勝れた者が局に當るやうになつて居る國は、最も善い國である。
産業界では、下から叩き上げた人間が少くない。それらの人々の苦勞は一通りではないが、政治の方面でも才能の士は、どこにでもころがつて居るものでない。政界に頭を出さんとする者も、並大抵の努力では目的の達成は六ヶ敷い。

國家はそれ故に、下は地方の政治から、上は内閣の高きに至るまで、人材本位主義が確實に行はれるやうにしなければならぬ。

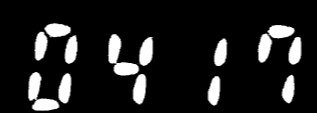
同時に、政治は責任を背負ふ肚のある人物が上に立つてやる。國民を率ゐるやうにしなければならぬ。爲政者は無論他の進言をも求める。併し最後の決はいつでも自分一人である。

嘗てプロシヤ軍の強かつたのは、各自が責任をもち、各自下を率ゐる上に服従することを知つて居た爲である。之がプロシヤ軍の仕組である。ナチスの國家は、政治組織にこの仕組をとり入れんとするものだ。

然りながら、此の場合でも、今日我等が議會と稱するものを無くしてしまふには及ばぬ。只これまでのやうな決議機關でなく、總統の諮問機關となれば善いのだ。政治はいつでも總統一人の責任に於て運ばれる。

議會は人材に頭を出すべき機会を與ふところである。議員のうちで、力量の優れた者は、他日國家樞要の地位にも持つて行かれる。議會は此の點に於ても必要缺くべからざる存在だ。

要するに、ナチスの國家では、地方自治體から内閣に至るまで、多數決の代議政治なるものを認めない。議會は諮問機關として、國の總帥者たるべき地位にあるものを助け、その命に依つて仕事を分擔させられ、議員も亦、必要があれば自ら政府に入つて責任ある地位に立たされるのである。



八、職能議會の新設

ナチス國家は、經濟その他特殊の知識經驗を要する問題を、その方の人間の集りでもない議會に向つて、漫然と諮問するが如きことをしない。議會は之を政治代表と、職業代表との二部に分ち、その上に調節機關として、元老院のやうなものを置くのである。

政治代表部でも、職業代表部でも、或は又元老院でも、表決は行はない。議會は表決の機關でなく、仕事の道場である。議員は諮問に答へる権利はあるが、議決権は與へられない。議決権は、いつでも統帥者の手に委ねられて居る。

以上の組織は、一人の人間に絶對の責任を持たせると同時に、一人の人間に絶對の権力を持たせんとするものである。此の制度で政治を行つたら立派な政治家が生れ出て、うまく國民を指導するやうになるであらうと思はれる。無責任な今日の議會政治のうちから、有爲な政治家の出現を望んでも駄目だ。

九、自ら鞭を垂れよ

扱て、以上述べたナチスの政治原理だが、之を實行するのは容易でない。併し、我等の第一に忘れて

ならぬのは民主的多数決主義の議會政治なるものが、決して昔から存在したものでなく、行はれ出したのは近來のことである、而してそれも必ず國家も國民も墮落せる時代であつたといふことだ。

ナチスの運動は變革の最も大なるものである。こんな大きな上から下までの改革は、理窟や形式だけで行はれるものでない。改革は單り、憲法の改廢ばかりでなく、國民生活の全部にまで及ばなければならぬ。それらの大きな仕事を成し遂げるには、ナチス自らが理想の國家組織を黨の内に實現し、それに依つて國民を率ゐることが必要だ。

それ故に、ナチスは今日より、既にナチスの信條を黨内に體現し、他日國家の組織をも之に倣はしむると共に、國家に對して、有用の者を提供し得るやうに準備して置かねばならぬ。(了)

ア (一)緒は緒言の部
 愛國(民族中心の)
 愛國主義の二種
 アメリカと發明
 アリアン人對ユダヤ人の衝突
 アリアン民族と文化
 アルトインツェネ(ゲイテック)(オール
 ・ドイツ)をも見よ
 イ
 インタナショナルイズム
 インテリの弊
 エ
 エンゲルリング(ぢむし)
 オ
 オーストリアの國家觀
 男氣(俠氣)と虔胸(青少年教育)
 オールドイン
 カ
 カイゼルと愛國心
 下層階級の人材
 カトリック
 金の慾
 ガ
 外國語不要論

外国人と國民
 外國人の歸化
 歸化と外國人
 歸化と公民權
 教育と外國語
 教育(と外國語)
 教育(と青少年)
 教育、智育の改善
 教育、語法主義の弊
 教育の境界
 虚榮の効用
 教會と信條
 快氣と虔胸(青少年教育)
 禁酒
 キ
 議員生活の苦勞
 議會(職能)
 議會觀
 ギリシヤ文明
 ケ
 結婚と公民權
 拳闘(ボクシング)をも見よ
 ゲ
 ゲルマン文明

「ゲルマニイレン」
 ゲルマン民族(ドイツ民族をも見よ)
 ゲルマン民族
 國家良きものと惡しきもの
 國家觀(オーストリアの)
 國家觀(バイエルンの)
 國家觀(三つの)
 國家の最大使命
 國家存立の本義
 國際主義(「インタナショナルイズム」をも
 見よ)
 國際主義(「インタナショナルイズム」をも
 見よ)
 國際主義(「ユダヤ人」)
 國際主義と國民主義
 黑人教育(笑ふべき)
 國民教育の統一
 國民的感傷
 國民的感情とナショナルイズム
 國民と外國人
 國民と准國民
 子供と准國民
 子は我
 公民權と歸化
 公民權と結婚
 公民權と兵役
 公民證
 混血の害

<p>ハプスブルグ王朝 三〇</p> <p>バイエルンの國家觀 七〇</p> <p>バイエルン中央黨 七〇</p> <p>バトリオチズム(愛國主義をも見よ) 七〇</p> <p>普選(形式ばかりの) 八一</p> <p>文化とアリアン民族 二二三</p> <p>文化發展の動力 二二三</p> <p>プロシヤ軍の組織 六六</p> <p>プロテスタント 六六</p> <p>兵役と公民権 六六</p> <p>ベトナム・ホールウエヒ 七〇</p> <p>ホフテントフ 七〇</p> <p>ホーフプロイハウス 七〇</p>	<p>ボクシング 四六</p> <p>冒險の意義 四六</p> <p>マイケル・フア(こがねむし) 一六五</p> <p>マルキシズム 一六五</p> <p>マルキシズムの人間觀 一六五</p> <p>マルクス 一六五</p> <p>ミンヘン 二</p> <p>民族國家 二</p> <p>民族と國語 二</p> <p>民族と優生法 二</p> <p>民族中心の愛國 二</p> <p>民族的觀念の養成 二</p> <p>民族平等觀批判 二</p> <p>無産黨の成分 二</p> <p>ユダヤ人 二</p> <p>ユダヤ人と大衆本位主義 二</p> <p>優生學 二</p> <p>優生法と民族 二</p>	<p>ヨゼフ二世 三〇</p> <p>ラブランド民族 三〇</p> <p>理想と現實 三〇</p> <p>逆帶觀念(子供) 三〇</p> <p>歴史教育(要領) 三〇</p> <p>芬蘭の意義 六八</p> <p>ローマ史の尊重 六八</p> <p>正誤 三</p> <p>四頁の二、三行目「といけぬの袋」削除。</p>	<p>多産獎勵 九〇</p> <p>多數決主義 九〇</p> <p>大衆本位不可 九〇</p> <p>代議政治 九〇</p> <p>斷種法 九〇</p> <p>智育の改善 九〇</p> <p>沈黙の美德(青少年教育) 九〇</p> <p>ツルカフ 九〇</p> <p>天才觀 九〇</p> <p>天才と發明 九〇</p> <p>天才の首領 九〇</p> <p>デモクラシー 九〇</p> <p>ドイツ語強制問題 九〇</p> <p>ドイツと世界制覇 九〇</p> <p>ドイツ民族の割據 九〇</p> <p>ドイツ民族の純粹性 九〇</p> <p>ドイツ民族の國家 九〇</p> <p>ドイツ人の體格 九〇</p> <p>ドイツ人の歴史 九〇</p> <p>ドイツの種族 九〇</p> <p>度胸と依氣(青少年教育) 九〇</p> <p>ドーヌ案 九〇</p> <p>ナショナリズムの意義 九〇</p> <p>ナチス運動の第一歩 九〇</p> <p>ナチス黨の核心 九〇</p> <p>ナチスの國家觀 九〇</p> <p>ナチスの新人生觀 九〇</p> <p>ナチス政治原理 九〇</p> <p>ナチスの民族觀 九〇</p> <p>ナチス黨員(勝當子の) 九〇</p> <p>肉體の新評價 九〇</p> <p>人間平等論 九〇</p> <p>農村の人材 九〇</p> <p>ノートの最 九〇</p> <p>發明と天分 九〇</p> <p>發明のアメリカ 九〇</p> <p>母親(の頭の改造) 九〇</p>	<p>雜婚(混血の害をも見よ) 二四</p> <p>雜婚の害 二四</p> <p>宗教的感情 二四</p> <p>職能議會 二四</p> <p>信條の力 二四</p> <p>准國民と國民 二四</p> <p>女子(ドイツ)の結婚と公民権 二四</p> <p>人材登用の急務 二四</p> <p>人材主義 二四</p> <p>人種觀(ナチスの) 二四</p> <p>政綱作成の道 二四</p> <p>青少年の教育 二四</p> <p>青少年の服裝 二四</p> <p>精神的覺醒 二四</p> <p>政黨(既成)と政綱 二四</p> <p>總統一任 二四</p> <p>君王中心主義批判 二四</p>
---	--	--	---	---